あたらしい道

令和六年秋号（２０２４年）

第５４０号

【肚を据える】

肚据えたら　次々と浮かばせられる
浮かんだ通りを　なさったら
もうそれで　何も気にすることはありません

（『松木草垣女史語録』より）

「肚据えて道を踏みしめる」

どうしても

道というからにはですね

やっぱり踏んで見なけりゃ

駄目なんですよ

松木草垣女史

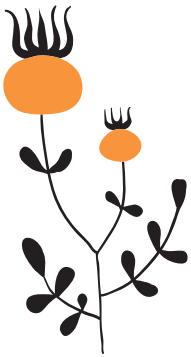
語録より

あたらしい道

令和六年　秋　５４０号

目次

テーマ「肚を据える」



ことのは

〔肚を据える〕……1

リバイバル座談会

肚決め――埼玉　林　賢……3

自分をおやかたさまにご報告――静岡　横山裕介……7

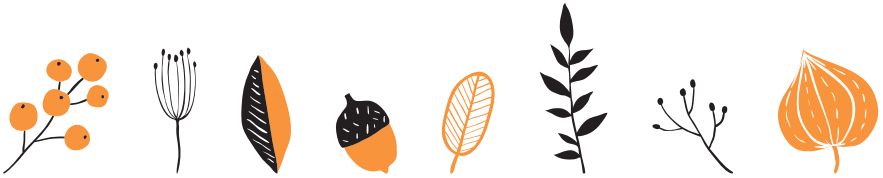
ここに日本がある――千葉　森河内長康……18

日本の国柄

大伴部博麻（おおとものはかま）（白村江の戦い）――東京　泉崎博明……25

寄稿

日本の課題と日本人のあり方――埼玉　市野道明……32



日本の人柄

北畠親房 ―― 神奈川 髙越研次
東京 佐瀬康志 ……50
東京 柳田泰

理と伝説

濡(ぬ)れ衣(ぎぬ)の理(り) ―― 三重 箱田増実 ……55

大和撫子

野村望東尼(のむらもとに) ―― 神奈川 芹澤和彦 ……64

つれづれ

お言葉との出会いの毎日 ―― 旭川 河合良明 ……73
「銅像」の教え ―― 大阪 大石麻瑳央 ……75
人さんを戴く ―― 東京 山口二雄 ……77

連載

羽曳野物語（二） ―― 柳田節 ……78

編集後記 ……86

（表紙題字　松木草垣女史御親筆　とびら書　松下賀奈子さん）

ことのは

〈肚を据える〉

肚据えて道を踏みしめる

―道は踏んでこそ―

どうしても道というからにはですね
やっぱり踏んでみなけりゃ　駄目なんですよ
唯知る丈では　人さんに話が出来ないんですからね

肚据えたら次々と浮かばされる

〝よしっ！　と云って肚据えるんだ〟っていう風に
次から次　次々々とね　ご自分の身の内から
浮かばされることばっかしになりますよって
宜しいか
で　浮かんだ通りをなさったらね
もうそれで何も気にすることはありません

肚据える

よくご自分でね　今晩お寝(やす)みになる前に
〝俺は肚据わっているかどうかな〟っていうことを
一遍ご自分に問い質(ただ)すんですね

肚つくり

―曖昧な人は建替えを―
お前さん達　肚が出来ていたら　何でもないんです
さあ〳〵〳〵　肚です　〳〵　肚つくりです　分りましたな
絶対の理を　何時も〳〵　曖昧にしていた
そういうお方は　建替えないと　何にもならない

（松木草垣女史語録より抄）

リバイバル座談会

「肚決め」

埼玉　林　賢

＊お父さんへのお詫びを決行

林　昭和五十三年十月に、御明断をいただきました。

若い頃から、ずっと一緒に、少林寺拳法をやっていた小浜さんという人が、不思議な人物なんです。

私とは正反対で、笑顔がいいんですね。「あの人みたいになりたいなあ」と何時も思っていました。「君のお行しているところ、俺も連れて行けよ」となったんです。

もう一つは、結婚して、子供が授かりまして、親孝行ということを、真剣に考えさせられていたんです。

いよ〳〵、御明断ということになったんですが、自分で、ある程度は予知していたんですが、おやかた様から、私にとっては大変つらいことを言われたんです。

「あなたね、お父さんにご苦労かけたでしょう」

「ハイ」

「今度、お帰りになったらね、あらためて、真底からね、『お父さん、本当に申しわけありませんでした』と、それを、一遍なさるんですよ」

「あなたは、おなかの中がごちゃ〳〵してますからね、一遍、お詫びをなさるんですね。それをね、いい加減でね、バカになさらないで、本気でね、あらためて、お父さんの前に坐って、『お父さん申しわけございませんでした。真底から、お詫び申し上げます』。それでいいんです」

親孝行は考えていたけれど、今更、父親にそんなこと出来んわけですね。一ヶ月ぐらい、もた〳〵、

しておりました。

たま〳〵、新人研修を友人と一緒に受けたところ、帰りの列車で、「決め」ということが話題になったんです。なりゆき上、「どうしても、父にお詫びをする」ということを、約束させられて帰ったんです。さて、御明断通りに実行しようとするんですが、家には家族がごちゃ〳〵していて、親父が一人の時なんてないんですね。

そのうちに、場に戻る日が迫ってくる。「ええい、家族に見られてもいい。やるぞ！」と肚決めて、奥の部屋をのぞいたら、ちょうど、親父が一人でおるんですね。対座は、少林寺拳法でいつもやっておりますから、ぴしっと坐って、

「若い頃、色々な心配をかけまして、申し訳ありませんでした。本当に、お詫びいたします」

と言って、頭を下げました。そうしましたら、本当に、おやかた様がおっしゃったように、胸の中のもや〳〵がなくなって、スーッとしたんです。まるで、目に見えるようでした。

＊喜びのよの字もない

御明断では、もう一つ言われたんですね。

「あなたはね、喜ぶということをご存じない。喜びのよの字もないの。『あ、こんなことではとんでもないんだ。なぜ俺は喜べないんだろうなあ。喜ぼう〳〵』と、自分で自分に、教えるんですね」

「あなたね、文句だらけで、喜ぶことこれっぽっちも知らない。それではね一生、ご損でございますよ。

あなた、筋目が良く、正しているんですね。ですから、文句言いたくなるんでしょう。でしょうけれども、それはそれとして、自分で、もっと喜ばなくちゃダメなんですよ。

毎日ね、朝、お目々が覚めた時にね、『有難いなあ。俺は、今日も幸せだなあ』と、喜ばなくちゃね。

次々と、色んなことを、おやりになるたんびに、『ああ、よかった〳〵。結構だ〳〵』と、とにかく喜ぶんです」

こんなことも、この道に通っている間に、何となく身につくようになりました。家の中が、みる〳〵しっくりいくようになりまして、今では、近

所の人が、「お宅を見ていると、見違えるようになって不思議な気がする」とおっしゃるぐらいです。

御明断の時に、自分の中のもや〳〵、業というんですか、そういうものを取り払う方法を教えていただいたように思います。

＊奔放だった若い頃

――若い頃の親不幸というのは？

林　私は、石材屋に生れて、四人兄妹で、男の子一人ですから、跡を継ぐと決っていました。「継ぐことは継ぐけれど、それまでは、自分のやりたいことをやるぜ」と、散々遊びまくったんですね。ケンカして警察の厄介になったこともあります。

自分が親になってみて、初めて親の有難さがわかるんですけど、やはり、親は立木を見るという字の通り、じーっと見ていてくれたんですね。こんな有難さも、この道につながって、初めてわかったという次第です。

わかったと言っても、自分が親のことが出来るかとなると、それは別で、今は、子供によって教えられたり、仕事でわからされたり、なか〳〵大変でございます。

――ご家族は何人ですか？　最近の石材の方はいかがですか。

林　子供は四人授かりまして、長女が中三、長男が中一、次男が小五、次女が小三です。

＊丁稚奉公

商売は墓石を主にやっております。

父の時代は、全部、自分でやったんです。私も一通りは出来ますけれど、今は数をこなさないと採算にのりませんから、とても一人ではやれません。

山から石を出す人、それを切る人、研磨する人、字を彫る人と、細かく分業化されています。文字を彫るといっても、サンドプレッシャー・コンプレッサーを回して、エアーを吹きつけるんです。石ノミでコツ〳〵という姿はなくなりました。

仕事を覚えるのも、私の時分、昭和四十一年ですが、まだ、丁稚奉公がありました。私は家で教

わるのを嫌って、外へ出たんです。弟子入りすると、私に似た境遇なのが、長野から、青森からと、四人も居るんですね。

朝の六時から夜八時まで、徹底的に仕込まれました。休みは月一回で、小遣いが三千円。それで、四年間辛抱しました。やはり、その時代があって、今の仕事がやれているんだと思います。

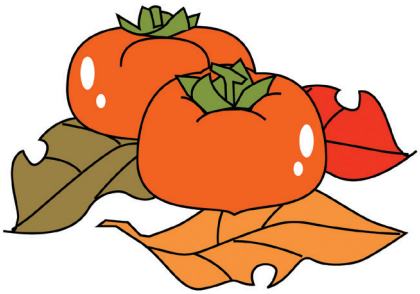
親方は三尺の物差を持っていて、文句言うのと、叩くのと同時なんですね。パン〳〵〳〵、と叩かれて、身体が覚えるのですね。職人の世界というのは、そんな風に仕込まれないと、ダメみたいですね。

家へ帰ってきても、親父が元気でしたから、なか〳〵やらなかったんですが、二十五歳の時に、父が高血圧で倒れたんです。それから、本腰が入ったという感じですね。

そうなると、周りの人が、嫁さんを世話しようとなるんですね。当時、私は少林寺拳法に一所懸命でしたから、お見合いをした後、四ヶ月間、放ってあったんです。仲人から、デートするように言ってきました。「週に一回ぐらいしか、時間が取れません。男だろうが、女だろうが、約束を守らない人は嫌いなんです」と言ってあったんです。

ところが、ある時、十五分ぐらい遅れてきたんですね。私は無性に腹が立って、彼女を責めて泣かしてしまいました。それから、仲人が何遍もとりなしてくれて、まあ〳〵、うまく何とかまとまったんですがね。

夫婦というのは不思議なもんですね。



リバイバル座談会

自分をおやかたさまにご報告

――親子は因縁の連鎖・天とは親と子――

静岡　横山裕介（ゆうすけ）

（私は、『全国青壮年の集い』でお話させていただく機会がありました。そのときのお話をさせて頂きます）

横山　私がこの道に繋がらせて頂いたのは、平成十九年の八月十三日ですから、当時の私は、まだほんの一年と七か月しか経っておりませんでした。そんな自分が、おやかたさまのいらっしゃるこの場でお話させていただけることを、本当に嬉しく思いました。

なぜここで私が話をする機会を与えられたのか？　それは、これまでに私がどんなことを思って、どう生きてきたのかを振り返りなさい。そして、このあたらしい道、父と母、ご先祖様、そして天であるおやかたさまに対する思い、それらを一度、自分の中で自問自答しながら整理し、おやかたさまにご報告をしなさいと、そういう意味があるんじゃないかと受け取らせていただきました。

それからまた一方では、おやかたさまと、この場の皆さん方に、自分自身をさらすという意味があるとも思っております。そんな、貴重な機会を与えられたわけですから、有り難く頂戴し、喜んで通らせていただきます。

＊母親っ子

私が小さい頃、父と母のことをどう思っていたかを振る返ってみますと、まず父に対しては、物心ついたときにはあまりよい感情は持っていませんでした。父から叱られたりした記憶はそれほどありませんが、何となく近寄りがたくて話にく

く、怖くて苦手な存在というふうに当時は思っていました。よく些細なことで父と母がけんかをして、父が母をこっぴどく怒鳴りつけるのを見ていて、そこまでひどく怒らなくてもいいのにと、口には出しませんでしたが心の中でいつもそう思っていました。一方で母の方は、あれやこれやと私の面倒をよく見てくれて、優しくしてくれるもんですから、私はいつも母にばかり甘えていました。小学校の宿題で、国語の教科書を読んで親に聞いてもらうという宿題があり、その時にはいつも母に聞いてもらっていました。また、かけ算の一の段から九の段まで読み上げるのを、よく母に聞いてもらいながら教えられました。

小学校五年生の頃にあった林間学校の活動の中で、お父さんとお母さんに青竹踏みを作ってプレゼントしよう、というのがありました。で、それを無事に作り終えましたら、今度はその作った青竹踏みの裏側に、親への感謝のメッセージを書きましょう、と言われました。そうして書いたメッセージが「お母さん、お父さん、いつもありがとう」というものでした。変ですよね、お父さんを先に書くのが普通です。子どもは自分の気持ちに正直ですから、あの頃はお父さんよりもお母さんの方に感謝していたわけです。

そのメッセージを読んだ父は、顔は笑っていたものの、何とも言えない寂しそうな様子でして、それは今になってもよく覚えています。あの頃は、せっかく一生懸命作ったのに、何でもっと喜んでくれないんだろうと思っていましたが、そりゃ、こんなメッセージじゃ寂しく思うに決まっていますよね。〝親の心子知らず〟とはいうものの、悪いことしたなあと悔やまれます。

＊お父さんを戴く

そんな私が、なぜ今のように父のことを心の底から好きになり、尊敬するようになったのか、それにはあるきっかけがあったんですが、その話をする前に、まず自分のこれまでの通り越しを少しお話しさせてください。

今でこそ、楽しければ笑って、ご飯をたくさん食べて、夜はぐっすり眠るという人間本来の姿に変えられてきたわけですが、そんな自分にも、こ

の世の何もかもが嫌になっていた、そういう時期がありました。

小学生の物心ついた頃から、学校での人間関係が自分にとってあまりにも苦痛で、中学三年の頃から生きていたくない、死にたいと思うようになりました。高校にいた頃も、そして高校を中退して家で引きこもりのようになっていた頃もずっと、この世からいなくなりたいと思っていました。生きるのが辛いから、もう死にたい、でも怖くてどうしても死ねない、だけど生きていたくない、どうすればいいのかわからない、もう何も考えたくない、ひたすらその思考の繰り返しです。そして、あろうことか、どうして自分を生んだのかと、親を恨んでいました。高校を中退してからは短期のバイトを繰り返したり、一人暮らしを始めてみたりと自分を変えようと必死でいろいろなことをやってみました。

ですが、何をやってもうまくいかず、本当にもうどうしたらいいのかわからなくなり、十九歳のある日、浜松市にある医科大学の精神科に母と一緒に受診しました。ここで、あなたは対人恐怖症ですと医師からはっきり言われ、その場で入院を勧められました。言われるまでは入院なんて考えてもおりませんでしたが、今までいやなことからは全て逃げてきたけど、もうここで本気で覚悟を決めるしかないなと、意を決して入院することにしました。

ここで入院していた期間は四か月になります。入院して数日がたった頃に、担当の先生から話があると言われて呼ばれました。そこで、精神病に効果がある治療法の中に『森田療法』というものがあるけれども、受けてみる気はないかと勧められたわけです。ただとにかくこの病気を治すためなら何でもやるという、その気持ちだけは強かったので、何も考えずにその場でＯＫをしました。

＊対人恐怖症　そして『森田療法』

森田療法はまず初めに「臥褥（がじょく）」といって、七日間、何もせず、ただひたすらベッドで上を向いて寝ているように指示を受けました。その中で許されている行動は、睡眠以外は三度の食事、トイレ、歯磨き、そして担当の先生との一日一度の会話の

みでした。逆に言うと、風呂も洗顔も衣服の着替えも他の患者との接触も散歩も読書も一切許されないわけです。この七日間は、言葉に表せないほど苦痛でした。どうにか無事に、ベッドの上での七日間の生活が過ぎ、しばらくしてふと、自分が普通に眠れるようになっていることに気がつきました。

それまでの私は、物心がついた小学生の頃から非常に寝付きが悪く、布団に入って二時間くらいたっても眠れないことがほぼ毎日のようにあり、ひどいときは、夜の十一時頃に布団に入って、午前四時まで眠れずにいたこともあります。それがいつの間にか、横になると知らないうちに眠ってしまうようになりました。

退院してからもう七年が経ちますが、夜眠れずに苦しんだ日は、あれから一度もありません。一度布団に入ると、眠るつもりがなくてもいつの間にか眠ってしまいます。今でも、不思議で仕方ありません。このことで、結局自分で自分を変えることはできないということ、みたまさんによって自分が変えられるということを、思い知らされました。

＊消えていた父への嫌悪感

四か月が経って何とか無事に退院の日を迎えることができました。今でも、この退院の日にあったことははっきりと覚えています。その日は、父が病院まで車で迎えにきてくれることになっていたので、それまでの間に、先生方から退院後の過ごし方などの話を聞いて、持ち帰る荷物も全部まとめて、それで後は父が来るのを待つだけとなりました。ですが、約束の時間を過ぎても父は来ませんでした。それで私は（どうしてこんな大事な日なのに、約束を破るんだ！）と、腹が立ってきました。けれど仕方がないので、さらに待ちます。でもそれでもまだ来ない。いよいよ私も本気になって、もう頭の血管が切れるんじゃないかっていうくらいに猛烈に頭にきました。それでもどうしようもないので、さらに待ち続けるわけです。

すると、今度はだんだん父のことが心配になってきました。（もしかして、父は何か事故にでも遭ったんじゃないのか？）と思い始め、さっきま

での怒りは完全に吹き飛んでしまい、もう何でもいいからとにかく無事でいてくれと必死で祈っていました。

そして、ようやく父が姿を見せ、その笑っている顔を見た瞬間（ああ、よかったなあ）と、心の底からほっとしたわけです。それで、遅くなった理由を聞くと、「道に迷っちゃった、ごめんごめん」なんてことを父が照れ笑いをしながら言うもんですから、その様子があんまり可笑しくって思わず笑ってしまいました。

すると、ぱぁっと自分の深いところに温かな日の光が差し込んでくるような感覚があり、自分の内側から嬉しさや喜びがこみ上げて溢れ出てきました。この瞬間から、父に対する思い方が百八十度切り替えられたわけです。本当に不思議としか言いようがありませんでした。

私は、少なくとも高校生の頃には、家族に対して、中でもとりわけ父親に対して非常に強く嫌悪感があり、それこそ徹底的に一方的に嫌っていました。とにかく、父の声や姿、態度から何から何まで全てが嫌で、腹が立って仕方がありませんでした。そんな自分がこうまで変えられるなどとは、夢にも思っておりませんでした。

＊因縁によって通らされる

結局、この四か月間入院した時期というのは、私にとって一番苦痛で今までにずっと逃げてきた「人との関わり」というものを、毎日起きてから寝るまでずっと強制させられた時期だったわけです。これは、横山裕介がどうしても通らなければならなかった、因縁によって通らされたものだったんだと思います。

そして、その苦労を乗り越えて無事退院した当日に、父への思い方を変えられた。父と私との間にあった溝が取り払われて、縦の筋がつながりを正しくいただいたわけです。これらの一連の流れは全て必然のもので、本当にありがたい道を通らせていただいたなあと、みたまさんに感謝しております。

＊大原専門学校で心機一転

病院を一月に退院し、その三か月後の平成十五

年四月から、静岡県浜松市にある大原法律公務員専門学校へ入学をして通い始めたわけです。私にとって学校という場所は、恐怖の対象以外の何物でもありませんでした。あの大原での日々も、身を削るように辛い毎日でしたが、その時の私には、精神科に入院していた中で得た経験や、すばらしい先生方から教わった多くのことがありました。辛いときにはそれらのことを思い出し、家族や友人達に助けられつつ、将来のために就職するというただその一点のみに向かって、全力で勉強に打ち込みました。そうした結果、小中学校事務上級の公務員試験に受かり、大原を主席で卒業をさせていただくことができました。

実は、この学校事務上級の試験の中で、とても不思議なことがありました。その時の私の成績では、公務員上級レベルの試験などは五回やっても受かるかどうかというところで、自信はないけどせっかくだから受けとけという感じで試験に臨みました。実際、テストの内容は非常に難しく、自信を持って解けた問題は一割程度でした。さらに、私はこの試験の時間を、実際には六十分のところを、どういうわけか九十分と勘違いしてしまいました。つまり、思っていた時間より三十分も早く終わってしまい、テストの見直しをするどころかまだ十問近く残っている問題を解けずに終わってしまったわけです。常識で考えれば、絶対に受かるはずがありません。なのに、その試験で受かってしまった。このときに私は、いつも私を見守っていてくれて、助けてくれる存在があることを実感しました。それは、天からの分かれであるみたまさんの能きであり、そのみたまさんを通して私を助けてくれる祖父や祖母、多くのご先祖様です。同時に、上っ皮の私一人だけの力というものがどれほど小さなもので、その目に見えない力によって今まで生かされてきたんだ、ということを知りました。

＊十日の下座

ある日、父から、三日の下座と十日の下座、やるとしたらどちらをやるかということを聞かれました。私は、それなら長い方がいいだろうと思い、大原を卒業した平成十七年三月に、十日の下

座をいただきました。十日間とは言っても、私にとってはまるでこの場に何ヶ月間もいたように思えるほど、何とも言えない味わい深い十日間でした。下座世話人横田泰和さんを中心に、どの方も皆、情が深くて温もりがあって、まるで家族のように接してくれたのが本当に嬉しかったです。私の悪い癖の一つが、自己中心的で人の都合を考えずに行動する点です。それが、この下座によって少しずつ直していただけたのではないかと思っております。

＊小学校に就職

このすぐ後の平成十七年四月から、浜松市にある中ノ町小学校の事務職員として勤務することになりました。この勤務してから最初の一年間は、自分にとって試練と呼べるものでした。このときお世話になった齋藤先生は、女性の校長先生で、定年を控えていたので、ちょうどその最後の一年間をご一緒させていただいたわけです。礼儀作法に厳しく、あらゆることによく気がつき、どんなことでも決して妥協をしない方でした。それに比べて、そのときの私は事務の仕事について全く何も知らず、社会のいわゆる一般常識にも非常にうとく、会話の受け答えもちぐはぐで、不器用でてきぱきやれない性格だったものですから、齋藤先生にとってはまるで理解できない人間だったんじゃないかと思います。何をやっても失敗の連続で、毎日のように何度も何度も叱られたり、怒鳴られたりしました。そのうちに、周りの職員からも白い目で見られるようになり、もうあんな学校なんか行きたくない、辞めてしまいたいと思いながら、でも絶対に辞めるわけにはいかない、石にしがみついてでも仕事を続けようと何度も言い聞かせて、ひたすら耐え続けました。

今になって思うのは、この一年間を乗り切れたのは、あの十日下座があったからではないかということです。十日下座を終えた私に、天が「今のお前ならこのぐらい乗り越えられるだろう」ということで、中ノ町小に配置して、あの齋藤先生を私に仕廻してくださった。そして私は徹底的に叩かれ、ぺしゃんこにされ、それでも何とか続けられた。ここに、天の深い思惑と言いますか、人に

は計り知れない素晴らしいものが潜んでいるように思います。

いつでしたか、いつも通りに自転車で学校へ行く途中、突然おやかたさまの、「その仕事があなたの天職でしょう。そうでしょう」という声が聞こえてきたことがあります。おやかたさまがそこまで見て下さっていたのかと思うと、胸が熱くなり、諦めずに続けてこれたことをありがたく思います。

＊松木草垣記念館

話は変わりますが、ひと月前にこの場へ戻った際に、二時間弱ほどかけて松木草垣記念館の中をじっくりと見て回ることができました。あの中で、タッチパネル式で自分が知りたい項目に触れると解説してくれるのがありますが、私はあれが特に気に入っています。順にたどって一つずつ見ていくと、おやかたさまやこの道のことが誰にでも、一般の人にもわかるようにすごく丁寧に教えてくれます。私はつい夢中になって、二度も繰り返し見てしまいました。ですが、あの記念館の中でなによりもすばらしいと思ったのは、おやかたさまが着ていらっしゃった着物や、使っていらっしゃった道具が展示してあって、それを間近で見られることです。

私はおやかたさまにお会いしたことがありませんので、当然ご明断やお仕込みも受けておりません。姿は見えずとも、すぐそばにいらっしゃる、ということがわかってはいても、写真や映像でしか見たことがありませんので、どうしてもついおやかたさまのお姿を求めてしまうといいますか、それであの展示されている着物を見ていると、何となく嬉しくなるわけです。

こうして今更ながらに思うことは、天や神、みたまさん等の全く目に見えないものの存在を、なぜ自分は、あるのがさも当たり前のように感じられるのかということです。今のこの世の中で、天やみたまさんの話をしたら、まず間違いなく変人や狂人扱いされます。自分もいわゆる現代式の教育を受けてきて、欧米式の文化に取り囲まれながら生きてきました。小さい頃には、親からこの道に関することは特に何も聞かされておらず、横で

話を聞いていた記憶も、本を読んだ記憶もないのに、このあたらしい道の具体的なことを知っても、何の抵抗も違和感も一切感じませんでした。むしろ、天やみたまさんの存在や、いざというときにご先祖様の加勢があるということを知ったときには、そうか、そうだったのか！という感じで本当に嬉しく思いました。私は、これは自分のご先祖様、祖父、そして父から譲り受けてきた徳のおかげではないかと受け取らせていただいております。だから、これは非常にありがたいことで、喜ばしいことなんだと思っております。

そうして、父や祖父から授かってきている人徳の他に、天徳というものがあると、この道によって知りました。そしてその天徳とは、世の中で自分を掘りつつ、この場に戻ってきて、松の間や紫の間の中でお行をして、身のうちにあるみたまを磨いて浄化していく。それによって授かるものが天徳だと、私は受け取らせていただいております。そうして考えますと、この天徳はあたらしい道にご縁のある者しかいただけないものですから、今の自分はとてもありがたいんだなあと思います。

＊一冊の本から日本を知る

子どもの頃のことを思い出していく中で、私が日本の歴史に興味を持つようになるきっかけとなった、ある一冊の本があったことを思い出しました。それは、私が小学生の頃に親が買ってきてくれた、漫画で描かれた古事記の本です。

その頃は古事記がなんなのかもよく知らず、予備知識を一切持たないまま読んだわけなんですが、これがもうとにかくおもしろくて、夢中になって何度も読み返しました。それまでは、神といえば絶対唯一の存在で、全知全能のものだというイメージがありましたが、古事記に載っている神はまるで違っていました。神がたくさんいて、まるで人と同じように生活をしていて、その中でみんなとワイワイやったり、悩んだり、ときには失敗して苦しんだりするわけです。人と変わらないその神々の様子に、とても親近感がわきました。そして、自分が生まれた国にこんなにも面白い神話があるということを、嬉しく思いました。

その後も、うちにあった歴史の本などを読みあさり、中学生の頃に吉田松陰のことを知るわけで

す。初めてこの人のことを知ったときには、「なんてまっすぐな人なんだ、過去にこんな人がいたのか」という感じで非常に衝撃を受け、理屈抜きで好きになりました。

（国のために）と普段思っている人でも、つい先に自分の都合を考えてしまい、そちらを優先してしまうことがあると思います。なのに松陰さんは、国のこととなれば自分の都合などは一切顧みず、動かずにはいられない。非常に国に対する想いが一途で、何の迷いも曇りもない。この人のすばらしい点は他にいくつもありますが、やはり何を置いてもこの国に対する想いの強さに脱帽させられます。まあ、そんな感じで、私はうちにあった本を勝手に読んでいく中で、自然と日本の国のことに興味を持ち、日本を好きになっていったわけです。

あたらしい道の月刊誌を読んでおりますと、よく道友の先輩方がおやかたさまからいただいたご明断の話が載っております。そのご明断の中でおやかたさまがお話しされることというのは、どうもお父さんのことが多いようですね。「あなた、お父さんは」とまず聞かれて、「あなた、お父さんとそっくりなんですよ」とか、「本当にありがたいお父さんでしたね」といったお言葉をいただいている方が多い。いつだったか、私の父がご明断をいただいた時のテープを聴かせてもらったことがありましたが、その内容もやっぱりお父さんに関することが多かったです。

まず天を頂点として、そこから無数に枝分かれをしている中に我々のご先祖様や祖父、そして父がおり、今私たちはその枝の末端に位置する中で生を授かっております。おやかたさまがおっしゃっている中で、『国が危ない　親子は因縁の連鎖である　それが日本の道である　この道を忘れて国が興ろうはずがない』というお言葉があります。私の父と祖父は、このお言葉を特に大切に、そして重く受け止めていたようです。

＊親と子の縁を実感する

また、第三九七号の月刊誌の中に、柳田さんの随想で、「親の心子知らず」というお話が載っておりました。柳田さんによりますと、「おやかた

さまと親子の関係だと知っているだけではなく、実感していることが重要なのですよ。実感していなければ、そういう親子の縁だと実感できるまで、普段の生活で仕廻しがある筈です。」という話を道友の方から教えていただいたとのことです。現実世界での親子、そしてみたまの世界での親子の繋がりを実感し、喜び、感謝する。結局人の幸せというものは、何を置いてもそこから始まるもんなんだなあ、と思いました。

いつだったか、母から聞いた話ですが、私が対人恐怖症で苦しんでいた頃に、父が「この子は親を助けてくれるようになる。大丈夫。」というふうなことを話していたそうです。その父の言葉が、とてもよくわかります。父と母の二人が喜ぶ姿を見るのが、幸せで仕方がありません。この二人の間に生まれてきたことが、どれほど幸せで恵まれているのかを、ようやく最近になってわかってきました。そして、私もこの道にご縁をいただき、繋がらせていただいた。つまり、おやかたさまとの親子のご縁を結んでいただけたわけですから、これを喜ばないで他の何を喜ぶのかと、改めてそう思います。

そういったことを思うようになってから、この頃では苦しいことがあっても、（よし来た、喜んで通らせていただきます。）ということを自然と思えるようになり、自分の中に余裕のようなものが少しずつ出てきました。これも、父と母、祖父、祖母、そして多くのご先祖様のおかげです。ありがとうございます。まだまだ精神的に未熟で、何よりも経験の浅い自分ですが、これから色々な人と出会う中で、人を立てて人を戴いて、自分は下座で、どんなことも喜んで陽気に通らせていただきます。

以上、お話ししましたことは、おやかたさまへのご報告であり、また、この上っ皮の自分自身に言い聞かせることでもあります。至らない点などがありましたら、どうか今後ともよろしくご指導ください。また、お聞き苦しい点がたびたびあったかとは思いますが、最後までご静聴いただきまして、誠にありがとうございました。

リバイバル座談会

「ここに日本がある」

千葉　（故）森河内長康

＊映画監督のときこの道と出会う

（森河内さんは、松木草垣女史の映画を撮られた方ですね――）

森河内　私が、羽曳野の「あたらしい道」本部の門を初めてくぐったのは、今から丁度八年前の四月八日〝お式〟の日でした。当時、私は、フリーで記録映画の演出を業とし、東京のテレビ局の海外記録番組を取材したり、国内のＰＲ映画を制作したり、けっこう忙しくあちこちを駆け廻りながら自分なりに充足した毎日を過しておりました。或る日、大学時代の友人であるＩ氏から「あたらしい道」の記録を撮ってくれないか、との連絡を受け、その頃、丁度海外での仕事を終えて次の予定も立っていなかったこともあり、喜んで引き受けさせて貰ったのが、この道に縁ができるきっかけでした。

Ｉ氏とは、大学では専攻する学部は違っておりましたが、学生時代、自治会活動を通じてかなり深い交わりを保っていました。社会に出てからは十年余りお互いに顔を合わすこともなく、風の便りも卒業して数年くらい、この頃にはお互いの消息も絶えておりました。久しぶりに見るＩ氏は、かつての獣の精気を全身にみなぎらせたような精悍な風貌が一変し、春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）というか、野太い地声は相変らずでしたが、どこやら身体全体、挙措動作（きょそどうさ）に丸みを帯び、いったい彼に何が起ったのか、いささか唖然とした想いに捉われたことでした。

四月八日、とりあえず満開の桜の下での〝お式〟の模様を撮影して欲しいとのことで、私はカメラ

マン一名と録音部一名を同行し、羽曳野にやって参りました。

予想に違い、「あたらしい道」本部の建物は規模が小さく、内部もおよそ装飾めいた造作はなくすっきりしたものでした。極端に申せば、広い空間と、床に敷きつめられた畳が、海外から帰国したばかりの私には、実に爽やかな印象として心に泌み込むように思われました。

四月八日は、生憎と雨になり、翌九日に〝おやかたさま〟松木草垣女史の庭園での散歩風景を撮影することになりました。

当日は、前日の雨が嘘のような春爛漫の撮影日和になり、我々は今や遅しと、庭にカメラを据え、主人公の登場を待っておりました。

午前十時を少し廻った頃、のどやかな春の太陽が斜め上方から玄関に差し込み絶好の光線具合になった頃、満開の桜花の下に、ノッと、まさにノッという感じで〝おやかたさま〟が出て来られました。白っぽい地の着物に、黒い羽織の小柄なおばあさまでした。今まで、ただのどやかな春の風景だったものに、一瞬の間に精気がスッと、湧き上るというか、入り込むというか、何かしら、爽やかな生命の息吹が風景の中に香りたつように、空間にみなぎるように思えました。

御散歩は二十分位でしたが、その間、〝おやかたさま〟のお顔にニコやかな笑顔が絶えることなく、時に乙女のハニかみの笑顔になり、あどけない童女の驚きの表情から一転して無心の笑みに移り、慈しみに満ちた母の笑顔になり、それが満天の桜の花に溶け入り、まさに〝花笑い、鳥歌う〟春の情景がかもし出されたのでした。

私は、いつか、横山大観の「無我」の一幅の画を脳裏に浮かべておりました。

そして、何故ともなく、「ここに日本がある」という言葉を繰り返していたのでした。

＊日本を思い始めた日

自分が、日本というものを明瞭に意識したのはいつのことだったろう。

日本人である私が、日本というものを殊更改めて思うというのはおかしな話ですが、実際のところ、これまで生きてきた道すがら、とりたてて自

分が日本人であることを意識したことはありませんでした。

私が小学校に入学したのは、終戦の翌年で、すでに新生日本はアメリカ流のデモクラシー教育に向って一直線に突っ走り始めていました。その後の六・三・三・四年間、常に西洋一辺倒の教育の洗礼を浴び続けて育ったのです。

その後数年間を少年時代からの大望であった映画界に過し、三十歳を迎える年に初めて海外にとび出しました。東南アジアを皮切りにアフリカ・インド・南米に、井の中の蛙にとっては見るもの全て只々新鮮で、それまでに鬱屈（うっくつ）していた肉体、精神が弾けるように開放された心地でした。

そして、二年たち三年たち徐々に己れを取り戻しだした頃、何ともとりとめない心境に捉われ始めました。

海を遠く離れた故国日本が自分のものではない、といった想い……日本列島全てが巨大な工場のように思え、そこに住んでいる人々が全て薄汚れた菜っ葉服を着て動き廻っている……巨大な煙突から間断なく吐き出す媒と死が列島を覆い、白けきったコンクリートの建物が不揃いな列なりを見せて建ち並ぶ……。

強烈な南国の太陽の下、鮮か過ぎる色彩に満ちた世界で、日本に対するイメージだけが灰色に霞んだ白黒の風景なのです。今思えば、それは自分自身の心象風景だったのでしょう。

その頃から自分が何者なのか、何をしているのか、常に曖昧な気分で、何となく自問自答をし始めたようです。

＊アフリカ原住民の文明に対する思い

そのような状態の頃、アフリカのケニアという国である青年に会いました。彼は現住民のキクユ族の出身で、特別に高等教育を受けている訳では無く、私達がたまたま取材中であったインド洋岸のマリンディという町近くの小さな村で電燈線の架設工事をしていた工夫でした。年齢は二十二・三歳の呑ん兵衛で、仕事が終ると毎日のように現地産のヤシ酒を入れたかめを大事そうに胸に抱えて、我々のキャンプにやってきました。そして飲むほどに酔うほどに、真っ黒い顔をテカ

テカに光らせながら、アフリカの現状、アフリカの未来、キクユ族の伝説など喋りまくり、時には日本のことについても仲々厳しい質問を浴せてきます。呑ん兵衛に特有の陽気さと皮肉っぽい鋭さを併せ持つこの素朴な民族主義者に、我々はいつか魅せられていました。

そして或る時、いつものように陽気に酒席が湧いていた頃、何となく彼の言葉に私が相槌を打ったところ、彼の顔が急に真顔になり、〝今の答え方は間違っている〟と言います。〝こういう時の返事は、ビリーブ（信ずる）を使うのが本当だ。あなたは、シンク（思う）と答えた〟そして、〝大事なことに心底同意する時は、ビリーブなのだ。シンクは、頭で同意することで、ビリーブは心の底で一体となる想い、両者は全然違う〟

私は自分の軽薄さを突かれた思いで、ガク然としました。そしてこの貧しい黒人の工夫に何かしら、現代の日本人にない重い存在感を感じたのです。

その後、様々な国を取材して歩くうちに、自国の明確な文化を持ちながら西欧の文明に強い影響を受けている国、現代に於いては西欧以外の国は殆んど全てということになりましょうが、特に開発途上国と呼ばれている国々で私が接触する人達に二つのパターンがあることに気付きました。

一方は、西欧の文明に対して、無批判に進んでいるものであるとの認識に立ち、迎合し同化し、かつての植民地時代の宗主国に留学などをして自国の支配階級に属す、乃至（ないし）は属そうと意図している人々。この人々は、自国の文化は全て古くて遅れているものとしてそれの取材を拒もうとする。

他方は、己れの属する国、乃至は民族の文明を体現している人達。

そして、敢えて独断と偏見を恐れずにいえば、前者は何やら軽佻浮薄（けいちょうふはく）、各人をとっても話題は豊富だけれど内容の色合いは一様で、こちらの心にハッと訴えてくるものが殆んどといって無い。

後者には、将にその人自身といえるような重い存在感があり、話の内容といい、一言の言葉・たたずまい全て独得のものとして私に向って光を放つように思えたのです。

翻（ひるがえ）って自分を省みるとき、いったい自分は、日

本人として、日本をどこまで認識し、体現しているのだろうか。

＊インドそのものを見た

インドを取材したときのことです。

ボンベイで小さな新聞社を経営している親日家の御家族と晩を共にしたことがありました。

特に夫人の方は、親日家を通り越した知日家で、故三島由起夫氏の大なる愛読者であり、訪日の回数も四度、三島氏とも面識のある人でした。

日本及びインドの話題がしばらく続いた後、話が三島氏の自決事件に及びました。夫人は、三島氏の自決がどうしても信じられない、原因は何なのだろう。

本当にあの素晴しい人が自決したのか。と目にうっすらの涙をにじませながら私に尋ねました。

知日家である夫人にも判らないこの出来事も、日本人である私なら説明できると思われたのでしょう。

当時の日本が、何となく曖昧なままでこの衝撃的な事件を処理したように、私にも明瞭な説明は出来ませんでした。そして、何となく日本人としての存在感を失った感覚で呆然と、夫人の五本の指が白い皿の中のカレー料理の上で踊るのを見つめていました。

サリー姿の夫人は、料理は全て五本の指で口元に運び、それが古来からのインドの食事作法で、スプーンを使うと味が変るのだと笑いながら言いました。

その姿が、私には実に優雅に奥ゆかしく、インドそのものに見えたのでした。

この時に、私の内部で日本人としての本来の自分、血の底に眠っていた何かが意識として芽生えてきたようです。

＊ここに本当の日本がある――日本の理

〝おやかたさま〟との最初の出会いのとき、〝ここに本当の日本がある。日本の全てがある〟と、思わず浮ばされたのは、それまでの、こういった背景からのようです。

「あたらしい道」の映画の撮影が終ると同時に、私はこの道につながらせて戴きました。

そして、日本には、「日本の理」という絶対のものが厳然として在るということを判らせて戴きました。

それから、今日まで足かけ八年間、〝おやかたさま〟から母親のように細やかな情で抱いて戴き、また父親のように厳しい情で仕込まれ、まがりなりにも日本人としての思い、日本人としての行いを身につけつつあるところです。

物心がついて以来、西洋式の教育を受けて、すっかり身についてしまっている自分を日本式の思いに建てかえていくのは、非常にむつかしい。

己れが、己れで、己れを作り上げていき、自分が築き上げる世界のみを是とする社会・閉鎖的で我の渦まく中で生きてきた自分を取り去るということは至難の行でした。

自分で〝生きる〟から、天によって、大自然によって、〝生かされている〟という思いに辿りつくまでには、様々に試行錯誤がくり返され、真剣になればなるほど〝自分〟が〝自分〟を何とかしようという自分式になってしまう。ついには、ジレンマに陥り神経性胃炎を発し、胃潰瘍に移行して吐血までするというところまでいきました。そこまでいっても、その元である我がとれないほどしにくい自分だったのです。

日本人が、日本人に立ち戻るのがどうしてこんなにむつかしいのか、我ながら不思議に思えます。

日本という国は、天が特にめっこを入れて産ませられた有難い国と教わっています。そして、大昔には、御先祖さんは、大自然を拝んで、日々をただ喜んで過されていたとも教わっております。

それが、元々の日本人だったのです。

日本は〝四季島の国〟とも教わっております。

世界中、どこに行っても日本ほど見事な四季の移り変りをもつ国はありません。同時に、日本は世界の気候をもっています。アマゾンの奥地だって日本の夏といくばくの差もありませんし、シベリアの奥地の冬だって、アフリカ人が雪を経験するほどには、日本人にとって衝撃的な体験にはならないでしょう。

＊本来の日本人に建て替わっていく姿

この美しい自然に溢れた日本、そこに産まされ

育くまれた生命の列なり、三千年に亘ってただ一筋につながる稀有な歴史を持つ日本人。

本当に、日本に生れて良かった、と沁々思えるようになりました。

この道は、善いとか悪いとかの区別をつける道ではなく、一切合財、成ってくる姿を喜んで通る道、〝有難い道〟なんだといわれています。

天によって、大自然によって、御先祖さん、みたまさんによって生かされている自分。拝むものは自分の身の内にある。すなわちヘソの裏側にあるみたまさん、本当の自分はみたまさんであることを今やはっきり体感できます。そして、自分が、本来の自分であるみたまさんにそいきることが、本当の日本人に立ち戻ることだと、つくづく思わせられる今日です。

そして、日々の暮らしでは、親子の理、夫婦の理をしっかりとたてなおし、成ってくる姿全てをよし！として、喜んで毎日を過す、このことが日本人としての基本であるようです。

以前に、或る座談会で、市井の老薬学者の先生から〝日本人が日本人にもどれば、今の病気の殆んどは無くなります。〟とうかがったことがあります。

この言葉はそのまま、現代社会の様々な病根を断つ唯一の根源的なもののようにも思えます。

八年間に亘って〝おやかたさま〟から日本の理として戴いた数々のお言葉、それが私の腹の中のみたまさんにはまり、生命をもった言霊として息づいており、その時その時に、ふっと胸にあがり口をついて出てくる、きっとそうなるという確信の上に喜びを湧き上らせていきたいと思っております。

通ってこそ道、素直な思いで毎日を実行する中で、自分本来に立ち戻り、本来の日本人に成っていく、ひいては、それが、日本が本来の日本に建て替っていく姿だと、かつての海外での体験を思い出しながら、何となく安心感に包まれている今日この頃です。

日本の国柄

―国を愛する者の誠―

大伴部博麻（おおともべのはかま）（白村江の戦い）

東京　泉崎博明

時代は聖徳太子から中大兄皇子の頃

日本の七世紀という時代は、人々の間に、「変えたい！」という機運が勢いよく高まってきた時期であったと思います。「政治的大改革の時代」と言い換えてもよいでしょう。

それは、ちょうど近代の明治維新にも匹敵する程のもので、その火付け役は、かの聖徳太子と言えるでしょう。すでに、大和朝廷のもと統一国家となっていたものの、実情はまだまだ各地の豪族の力は強く、国家の基盤は盤石とは言えない状態にありました。

この状況を打破すべく、新たな息吹を吹き込んでくださったのが聖徳太子（五七四～六二二）です。ことに太子の制定された「十七条憲法」は、これからの日本国の施政方針を明確に示したという点で、当時の人々にはかなりのインパクトがあったと思われます。

また、対外的には、隋の煬帝に宛てた「日出る処の天子……」の国書に象徴されるような、国として他国と対等に渡り合おうという「自立の心構え」を示してくださったことも、国家意識を高める要因になったと思います。

当時、大陸では、長い間の戦乱を治め、隋という大帝国が、その強大な武力をもってその影響力を周辺諸国へ向け始めている時期であり、大陸の動きは日本にとって一瞬も気をぬけないものでした。一方で、新たな国造りの為に大陸の文化を様々に取り入れる必要にも迫られていましたので、こ

の時期の大陸外交はことさらに重要な政治課題であったわけです。

国造りの礎を築かれた聖徳太子が亡くなられた後、その子息の山背大兄皇子に天皇即位の期待が強まりましたが、そのとき、ますます権力を強めていた豪族、蘇我入鹿は、この流れを嫌い、武力を持って山背大兄皇子を襲います。

この蘇我氏の暴挙に大きな危機感を抱いて、実際行動に出たのが、中大兄皇子（後の天智天皇・六二六～六七二年）と中臣鎌足でした。それが、後に「乙巳（いっし）の変（六四五年）」といわれる宮中でのクーデターです。「乙巳の変」の後、日本を確固とした「中央集権」「律令国家」として早急に整備しなければならないという思いで、「大化の改新」という一連の大政治改革を断行していくことになるのです。

また、朝鮮半島は、日本にとって交易上の要衝で、特別な注意を払っていた地域。当時、半島は、所謂「三国時代」、「高句麗（こうくり）」、「百済（くだら）」、「新羅（しらぎ）」が割拠し、できうれば半島全域を我が物にしたいという野心のもとに、互いにしのぎを削っているという状況でした。当時の日本はとりわけて「百済」との関係が深く、日本にとっては、大陸文化を取り入れる窓口といってもよい国であり、良好な関係を維持していくことは重要な外交政策の一つでした。

これからお話しようとする「大伴部博麻（おおとものはかま）」という人は、こうした時代背景のもとに生を受けた人物でありました。生年不詳ですが、おそらく七世紀中ごろ生まれの人でしょう。

この人のことは第二次大戦前の学校教科書には載っていたのだそうですが、戦後になってすっかり忘れ去られた感があります。では、大伴部博麻の事績とはどんなものであったか、少し詳しく見てみます。

白村江の戦い

大陸の帝国「唐」は、六一八年の建国以来、着々とその勢力を強め、七世紀中ごろには中央アジアの砂漠地帯をも支配する大帝国となり、周辺諸国に政制・文化などの面で多大な影響を与えておりました。首都は長安。唐が、朝鮮半島をその支配

下に置こうとして、具体的な行動を起こしたのが、六六〇年でありました。まず、半島の新羅に目をつけて、同盟を結び、唐・新羅連合軍として、すかさず百済を攻めて滅ぼしてしまいました。このとき、百済の王族をはじめ多くの家来たちが日本に逃亡したのです。

百済の王子は、中大兄皇子に対して、

「故国では、まだ、多くの武将たちが残っていて反撃の機をうかがっています。どうか、我が国に力を貸していただきたい」

と、頼み込みます。ここで、皇子は思案します。

――唐・新羅連合軍は強大この上ない。我が国が参戦すれば甚大な被害が出る事は目に見えている。しかし、友好国の百済を助けない訳にはいかない。義のためでありまた、もし、新羅が勝って半島を統一すれば、その後に日本侵攻を企てるに違いない――

そして、皇子は決断します。

――日本を守る盾をつくるという意味においても、今、百済を助けるために行動を起さねばならない――

百済の要請を受け入れた皇子は、早速四〇〇隻の軍船を整え、二七、〇〇〇名の兵を朝鮮半島に送り出しました。そして、半島中部の白村江河口において唐・新羅連合軍と大激戦を繰り広げます。

これが、白村江の戦い（斉明天皇七年（六六一年）～天智天皇二年（六六三年））です。足掛け三年のこの大戦に日本軍は大敗北を喫し、日本側死傷者は一〇、〇〇〇人を超えたとも伝えられています。

長安での意外な捕虜生活

大伴部博麻は、この白村江の戦いのために、徴兵され従軍していたのです。博麻は、現在の福岡県八女市出身のごく普通の一般市民と思われます。従軍当時は、きっと二〇歳前後の若者であったことでしょう。詳しい経緯は不明ですが、白村江の敗戦で多くの日本軍人が唐軍の捕虜となり、長安へと連行されます。博麻もその中の一人でした。

長安の捕虜収容所には多くの日本人がおりましたが、その中には、以前から遣唐使として唐にわたり勉学に励んでいた留学生もまた、両国が戦争

状態にあるという理由で、捕虜として収容されておりました。

長安における捕虜の待遇というものは、どうもかなり緩いものであったらしく、捕虜といっても、長安の街を自由に行き来できたし、ほぼ市民と同様の生活を営むことが出来たようです。

このことは、博麻にとっても、日本にとっても実に幸いなことでした。さて、博麻がどんな人柄であったか想像するしかありませんが、たぶん「人当たりの良い実直な働き者」であったと思われます。きっと収容所の中でも、同胞の日本人のために何くれとなく世話をして回っていたのではないか。当然多くの知り合いもできていたことでしょう。事実、博麻は遣唐使の留学生とも知り合うことになるのです。

これは、平時の日本ではありえない事です。留学生といえば、連、君といった姓をもつ家柄で、学識、身分の差がありすぎて、そもそも一般庶民とは出会う機会がない。しかしこの収容所生活では、博麻はこれらの留学生のためにも、さまざまな下働きをして世話をしたのでしょう。いつしか、彼らとも友人というレベルまで親密になっていったようです。

記録によると、博麻と友人となった留学生は四人ほど知られています。土師富杼（はじのほど）姓は連、氷老（ひのおゆ）姓は連、筑紫薩夜麻（つくしのさちやま）姓は君（きみ）、弓削元実児（ゆげのもとさねこ）姓は連。日常のあいさつやさりげない日々の会話から、身分を超えた交流が始まり、互いの隙間が埋まっていったのでしょう。長安でこの五人が出会ってから、実に六年という月日がある意味、平穏に過ぎていきました。そんなある日。博麻は、故郷日本に関する一つの極秘情報を入手するのです。

祖国存亡にかかわる重大情報

それは、

――唐が本格的に日本に攻め込もうとしている

――

というものでした。わが身が凍り付くほど驚いた博麻は、早速このことを留学生の友人四人に知らせます。

――世界に冠たる大帝国の唐が、本気で日本に攻め入ったら、それこそ『白村江の戦い』の敗戦

などの比ではない。とんでもないことになる――「とにかく、一刻も早くこの情報を本国に伝えなければならない」

五人は話し合いを重ねましたが、行き着くところは、「緩い扱いとは言え自分たちは捕虜だ。長安を抜け出すことなどできないし、仮にできたとしても、内陸の長安から海岸線に出るまでに、ゆうに二五〇里（一、〇〇〇キロ以上）を踏破しなければならず、その旅程でさえ、決して安全なものではない。そして日本までの渡航費用などあるはずもない。」というものでした。これといった妙案がでることもなく、話し合いといいながら、ほとんど重苦しい沈黙が続きます。しばらくして、そんな沈黙を破るかのように、博麻がきっぱりとした口調で驚くべきことを言ったのです。

自分を売って奴隷となる

「わたしがこの地で「この身」を売って奴隷になります。その売った代金をあなた方四人の帰国費用に充ててください。そうして一刻も早く帰国を果たし、この情報を要路の方々にお伝えください」

四人は耳を疑い、そして驚き、当惑しました。

「ばかなことをいうな。博麻にそんなことをさせられると思うか」

「そうだとも。帰国する時はいっしょに、と約束したではないか」

「これまで、博麻にはいろいろと世話になってきた。そのうえ、お前の身を売った金で我々だけが帰国することなどできようか」

四人は、あきれて口々にそんなことを言い合います。

しかし、他にこれといった手立てはありません。四人は、やむを得ずこれを了承し、言葉通り、博麻は奴隷となります。

博麻がその身を売って作ったお金を渡航費用として、土師富杼（はじのほど）ら四人の遣唐使留学生が、無事に日本に帰還したのは、翌年、天智天皇十年（六七一年）のことでした。

三〇年ぶりの祖国

この報に接し、強い危機感を抱いた天智天皇は、早速「唐の侵攻」を想定して様々な防御対策を講

じます。岡山県鬼ノ城、山口県石城山神籠石、福岡県鹿毛馬神籠石など、九州、瀬戸内、畿内に次々に砦（古代山城）を築いていきました。同時に、唐との関係改善を計る努力も忘れませんでした。

一方、唐に留められた博麻は、その後、ほぼ二十年以上の奴隷生活を余儀なくされたのですが、その間の彼の人生がどんなものであったか、知る由もありません。普通人以下の「奴隷」という身分である以上、筆舌に尽くせないことも多々あったはずです。しかし、博麻のこの二十年の生き様は、きっと立派なものであったと信じます。

ある日のこと、博麻は、旧知の新羅の役人に呼び出されます。

「私は、近々「外交使節」の一員として、日本に行くことになった。本国からその指令を受けた時、不思議なことだが、お前のことを思い出したのだ。もし帰国を望むのなら、我らの船に一緒に乗せてやってもいいぞ。」

この申し出を受け、博麻は入唐以来、実に三十年を経て無事日本に帰国することになったのです。時に持統天皇四年（六九〇年）のことでした。

このとき、すでに戦争は終わり、唐、新羅、日本はともに友好的な関係を築いておりました。

博麻を伴った朝鮮使節団は、慣例に従って朝廷より厚い歓迎をうけます。このとき、例の使節役人が、持統天皇に「大伴部博麻にまつわる一連の事情」を伝えます。

「帝の民、大伴部博麻は、昔、白村江の敗戦後、捕虜として長安にあるとき、唐による日本侵攻の脅威を予知し、日本の国を愛い、そして仲間の友を愛うあまり、自分の身を売り、その代金を友四人の帰国費用に充て、自身はかの地に奴隷として二十年以上を経て後、このたび帰国するに至りました」

史上唯一の勅語を賜る

博麻のことを知った持統天皇は、彼に拝謁を許し、次のような勅語を賜りました。

「朕、その尊朝愛国、己を売りて忠を顕すことを嘉す」

（私は、お前が朝廷を尊び、国を愛い、己を売ってまで忠誠を示した事を嬉しく思います）

博麻の「愛国心」に対して、持統天皇がいかにお喜びになったかは、この勅語はもちろん、その博麻への「下賜の詳細」によく現れていると思います。

「博麻を従七位下に任じ、絹四匹（一匹＝四丈）、綿十屯、布三十端、稲千束、水田四町。また、子孫三代に渡り水田相続を許可と税の免除を約す」

「愛国」という語の語源は、持統天皇のこの「勅語」に由来し、また、それは「天皇から一般個人に向けられた史上唯一の勅語」とも言われています。

歴史の流れを変えた（？）愛国の誠

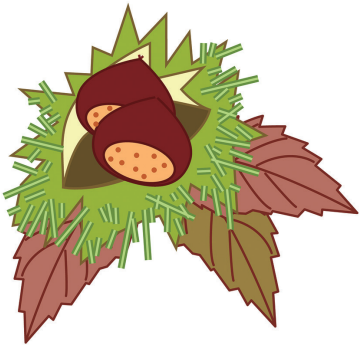
以上が大伴部博麻の物語ですが、私は、博麻が国の危機を察知したとき、この国を愛（おも）い護ろうとして、自分の事を少しも顧みることなく決然として行動を起こしたことに、深い感動と畏敬の念を覚えるものです。

当時、博麻の得た極秘情報のとおり、唐は本気の本気で「日本侵攻計画」を推し進めていたようです。しかし、その後の高句麗滅亡や新羅の半島統一などの情勢変化に伴い、唐はその方針を変えざるを得なくなり、結果として七〇一年の遣唐使再開を機に両国の国交回復ということになって行ったのです。

天の区々建てがどのようなものであったかは、知る由もありませんが、想像を逞しくして言えば、あるいは、博麻の愛国の真心が天を動かしたのかも知れません。

天が「博麻のまこと」に感じて、当時の国際情勢を大きくコントロールして、戦争という事態を回避させてしまったのかも知れません。

そして、博麻の本当の功績は、実はそこにあるのではないか、と私には思えてならないのです。



寄稿

日本の課題と日本人のあり方

埼玉　市野道明

あたらしい道　北陸会館における講演要旨

令和6年3月24日

はじめに

現在の日本は、内外からの厳しい圧力を受け、今にも難破しそうな状況にあります。日本の政治、経済、外交、道徳、思想は乱れに乱れ、各方面で問題が山積しています。そのうえ、中国の圧力は半端ではありませんし、巨大地震の脅威も間近に迫っています。私たちは、この国難をどのようにして乗り越えるか、それが一番の課題であります。

それには、戦後に失くしてしまった「日本人の心」とも言うべき、「建国の精神」を取り戻し、秩序ある国に建て替わらなければなりません。そして、何よりも知っていただきたいのは、もともとの日本人は、「みたま」が働く「理の民族」であったことです。それを知らずして、この国難を乗り越えることはできません。

そこで、前半は、あたらしい道の教えの神髄である、「みたま」のお話をさせていただきます。そして後半は、中国、ロシアの脅威が、戦争に発展しそうないま、その原因を「松木草垣女史」から明かされておりますので、それについて、お話し致します。そして、有事と巨大地震が迫る避けがたい現実に対して、如何にして日本を守るかということ、これについても、女史から教えられておりますので、それをお話しさせていただきます。

みたまは普遍的存在

「みたま」は普遍的存在であります。私たちはおやかた様から、自分の身の内に「みたま」が存在し、「みたま」によって生かされていることを教わりました。そして何よりも、「みたま」により守られていることを知っていただきたいのです。「みたま」のことを理解いただくために、今日は、こんな話をしてみたいと思います。

近年、多くの外国人が日本を訪れています。特にヨーロッパからの訪問者が増えていますが、彼らの多くが宿泊するマリオットホテルやヒルトンホテルには、ベッドの脇に聖書が置かれています。これについてホテルの支配人にお尋ねしたところ、ご年配のヨーロッパの方々は、夜休む前に、聖書を手に取る方が多いのだそうです。読まなくても、そっと手を置く。それだけでも、神に思いを送る行為となるそうです。これは日本人が神棚や仏壇に手を合わせて、朝晩の祈りを捧げる行為と似ています。

聖書はヨハネ伝第一章の冒頭で「神は肉体に宿る」と教え、「神は言葉となって、イエスの身の内に宿る」と教えています。実は、この肉体に宿る神こそが、おやかた様の教える「みたま」であります。私たちの肉体には「たましい」が存在しますが、たましいが磨かれると「みたま」となり、神のような働きとなるのです。

この「たましい」を一流の科学者や医学の大家は、次のように説明しています。

お一人は遺伝子研究の世界的権威者の村上和雄氏（筑波大学の名誉教授）です。残念なことに3年前に故人となられましたが、この先生は「人間のたましいは肉体の中核にあって、人間を超えた偉大なるものにつながっている」と教えました。そして、「たましいと遺伝子をつなぐものが命である」と教えています。村上氏は、その偉大なる力を「サムシンググレート」と名付けました。創造主神のことであります。

そして、もうお一人は解剖学者として有名な三木成夫氏であります。やはり、数年前に亡くなられましたが、東京医科歯科大学で解剖学を究め、晩年は東京芸術大学教授として活躍した先生です。この先生は「人間の内臓は宇宙につながり、人間は宇宙によって生かされている」と教え、人間の内臓には「宇宙のリズム」が組み込まれていると教えました。

この宇宙と「みたま」のつながりは、量子力学でいう素粒子の「粒子特性と波動特性」として理解することができます。量子力学では、私たちの肉体を構成する細胞の素粒子は、粒

子であると同時に波動エネルギーで、宇宙を飛び交っていると教えています。このことが分かると、人間の内臓に宇宙のリズムが組み込まれているということが理解できるのです。

近代の量子力学では時空を超えた世界が明らかになっており、１億光年離れていても、瞬時につながる素粒子があることが確認されています。２０２２年のノーベル物理学賞は、これを実験的に証明したフランス、アメリカ、オーストリアの科学者に授与されました。この現象は、アインシュタインの相対性理論、つまり「光よりも早いものは存在しない」とする理論では説明できないもので、４次元を超えた高次元時空への端緒を開く重大なる発見といえるのです。いま5次元時空の存在を解明するため、スイスで壮大な実験が世界原子力機構によって行われています。５次元は時間軸が無数に存在する世界で、過去、現在、未来が同一次元に存在する、高次元の世界をいいます。

私たちの「みたま」は、過去、現在、未来を通して生きぬく、普遍的存在であり、遺伝子と同じように、親から子、孫へと伝達されます。「みたま」は先祖の徳や借りを引き継いで生まれてきます。それを輪廻転生といいますが、自分の徳や借りも、望むと望まざるに拘わらず、子や孫に引き継がれていきます。

私たちの細胞は、親の遺伝子を受け継いでいることは誰でも知っていますが、「みたま」が遺伝子と同じように、親から子へと伝達される、普遍的存在であることは、なかなか信じてもらえません。たとえ真実であっても、宗教的な教えとして敬遠されがちです。

徳を持って生まれてきた人はさらにその徳を積み、借りを持って生まれてきた人は、その借りを返すために、徳を積むことが必要です。それを「みたま」を磨くというのです。徳をもった人は、それほど苦労をせずに生きて行くことができます。ただ運の良いことに安心して、徳を使い果たす人がいるのも事実です。徳が無いと感じる人は、徳を積むように努力すればいいのです。人一倍の努力が必要な人もいらっしゃいますが、それを乗り越えると運命が開花するのです。

運命の開花

私が若いときに経験した大きな体験についてお話をします。父は正しいと信じた道を実行するため、大きな土地や家屋を失う状況に陥りました。途方に暮れていた私でしたが、おやかた様は、「あなたのお父さまは立派な方で、正しいことを為さろうとしています。天がお父さまを抱きますから、どんなことがあろうとも大丈夫です」と諭されました。そして、親を信じ、親を戴いて、親とともに歩むことを教えていただきました。私はそれを信じて「あたらしい道」に通い、人生を切り開いていただきました。父はその後、信じられない展開を頂き、すべてが救われたのでした。それは全部、「みたま」の力であります。この教えこそが、あたらしい道の「神髄」であります。

ここで、京セラの創業者、稲盛和夫さんのことを、少しお話しさせていただきます。京セ

ラはセラミックの陶磁器を母体として、半導体、通信、エネルギー事業を行う、売上げ二兆円、従業員2万名を擁する日本を代表する大企業です。そのうえに、ＫＤＤＩ（ＡＵ）の創業者でもあり、大型倒産したＪＡＬ（日本航空）の会長として、再建を果たした現代の偉人ともいわれる経営者です。

桁違いの大物でありますが、私はこの方に、拙著「いま、日本の危機に問う」の本を贈呈させていただきました。その後お手紙をいただき、そこには、「みたまさん」を皆さんに、是非ともお伝え下さい、と綴られていました。その時は、すでに引退されており、時折、托鉢のお行をしているとお聞きしました。私はこの話を聞いて、涙がこぼれた記憶が御座います。

稲盛和夫さんは生まれも育ちも、決して恵まれたものではありませんでした。大学を出て、入社した会社は給料も遅配するほどの、いつ倒産してもおかしくないほどの、ちっぽけな会社でした。多くの困難を乗り越えて成功なされましたが、成功してからも常に仰っていましたのは、「あのような若いときの苦労があったから今の自分がある」と謙虚に語っています。

そして、「いまの自分がしようとしていることは、世のため、人のために役立っているのか、自分の名声や金儲けのためにやってはいないか」と、いつも自分に問うのだそうです。その答えを待ってから毎日の仕事に取り掛かると仰っていました。それが毎日のルーティンと言っていました。まさに稲盛さんは「みたま」が磨きに磨かれた人でした。

お手紙をいただいた数年後に、90才で天寿を全うされましたが、きっと天上で、日本の再

建のために働いて下さっていることでしょう。

天地自然の加勢

おやかた様は「みたま」が磨かれて開花すれば、どんな困難も乗り越えることができると教えました。それは「天祐自助」の言葉が教えるように、正しい誠の心をもって、世のため、人のためと精一杯の努力した人に、天は加勢するという意味です。その加勢の主は、私たちの「みたま」であります。人は苦労を乗り越えると「みたま」が磨かれて、「みたま」が開花するのです。

同じような言葉に「天祐神助」があります。日露戦争で東郷元帥が、ロシアのバルチック艦隊を撃破したとき、天祐や神助が必ずあると信じていた。正義あってこその「天祐」、誠あってこその「神助」と語ったことは有名です。

わが国は鎌倉時代、中国「元」（皇帝フビライ）の脅威に果敢に立ち向かった歴史があります。「元寇」であります。日本は、１２７４年の「文永の役」と１２８１年の「弘安の役」という、２度にわたる中国「元」による侵攻を受けました。モンゴル帝国は、１２６０年に国名を「元」と改め、北京を首都とした国で、歴史上、中国の帝国として扱われています。

この時代は、朝廷と幕府の対立が激しく、国の政治は乱れ、度重なる飢饉、地震、疫病に

苦しんでいましたが、元寇の国難に対しては、朝廷、幕府、神社、仏閣、民衆が一つになって国を守り抜きました。

圧倒的な軍事力の差があり、とてもかなう敵ではありませんでしたが、大自然の助けを得て、国が守られたのでした。これが俗にいう「神風」です。

弘安の役では元軍14万人、４千400隻の大軍団が博多湾を埋め尽くし、これに対して６万人の鎌倉武士団が対峙しました。２カ月にわたる激闘のなか、多勢に無勢で日本の負けが濃厚になったとき、博多湾を大型台風が襲い、一夜のうちに元軍が海の藻屑と化したという、衝撃的事実があったことは有名です。

当時の「元」は、中国全土と朝鮮半島はもとより、西は東ヨーロッパ、トルコ、シリア、南はアフガニスタン、チベット、ミャンマーとアジア大陸の四分の一を領土とした世界一の強国でした。その「元」が日本を征服しようとしたのが、元寇でありました。

日蓮は、元寇が起きる14年前に、立正安国論を上梓し、時の執権、北条時頼に「正しい政治を行なえ」と訴えました。このままでは中国「元」に征服されてしまうと警告したのでした。元寇で戦ったのは時頼の子の北条時宗でした。時宗は十八才で執権となり、元寇が終った３年後に、病に倒れ32才の若さで亡くなっています。まさに、日本を救った英雄でありました。

現在、日本は中国と同じような状況にあることを認識しなければなりません。国の「為政者」たちに、正しい心を持って政治を行なえと訴えなくてはなりません。そうでなければ、わが

国は中国とロシアにつぶされてしまいます。

国を守ることを許さない憲法

ところが、私たちは国を守る憲法さえ持ち合わせていません。憲法9条の改正は当然に必要なことであり、併せて、巨大災害などの非常事態を想定した「緊急事態法」の整備すらできていない状況にあります。戦争にいかないまでも、武力攻撃を仕掛けられたときの法整備も不十分な状態です。

憲法九条の「正義と秩序を基調とする国際平和を忠実に希求し、武力による威嚇と国の交戦権は認めない。陸海空軍、その他の戦力はこれを保持しない」とする条文は、自衛隊が合憲か違憲とかという問題ではなくて、自国を自らの手で守ることが許されていない憲法なのです。

それだけではありません。日本国憲法は国の元首を定めていないのです。これは日本の憲法を草案した、アメリカによる意図的な行為ですが、そんな憲法を金科玉条の如く守っている日本の姿をみて、日本を良く知る外国人は嘆いています。

戦後に失われた建国の精神

いまから72年前の昭和27年、この年はサンフランシスコ講和条約が結ばれて、日本が独立

国になった年です。ようやくアメリカの占領が解除され、日本の夜明けが訪れたと思っていた矢先に、おやかた様の「みたま」から「国が危ない、国が危ない」と天音が流れ、日本の将来に警鐘を鳴らしたのでした。

それは、７年におよぶアメリカの占領統治によって、日本が本来の日本でなくなったことへの天の警告でした。外国に誇るべき、日本の伝統的精神文化は根こそぎ奪い取られ、か弱い日本人になり下がってしまいました。日本は、かつては外国が手本にするほどの尊い国であったのに、このままでは、「あと100年」したら、国が亡びてしまうと警告したのです。日本の正しい「国の歴史と信仰と人の道」を教わってこなかった、戦後生まれの人たちが８割を超えるいま、日本の将来は本当に危ないのです。歴史学者アーノルド・トインビーは、自国の正しい歴史を学ばなかった民族は例外なく、滅亡すると教えた言葉が鮮明に蘇ってきます。

「外国が手本にするほどの尊い国」というのは、どういうことをいうのでしょうか。それは色々な理由がありますが、一つだけ理由をあげますと、「万世一系」の天皇のもとで、２千年以上に続く世界最古の王朝国家、それが「日本」であるということです。そして、国民は天皇を心から尊敬し、天皇のもとに一致団結している姿に、畏敬と尊厳の念を抱いていたのでした。それは、次に示す事柄が証明しています。

世界が感服した君が代と教育勅語

明治36年、日露戦争の前年、ドイツで開催された世界の国歌コンクールで、日本の「君が代」は「荘厳にして優雅、天上の音楽」と評価され、最優秀の世界一位に輝いたのでした。この歌は、平安時代の905年、古今和歌集に収録された「詠み人知らず」の和歌で、天皇の治世が国民全体に喜びをもたらしていたことを教えています。

帝国主義が全盛を極めていた時代に、君主を千代に八千代にと讃える「君が代」の歌が、世界から最高の評価を受けたのでした。

これに対して、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどの外国の国歌は、壮絶な闘争を経て、自由を勝ち取った歴史が歌詞に刻み込まれています。そのため、戦争や血、敵といった戦闘的なイメージを感じさせ、日本の国歌とは異質な印象を感じさせます。中国は抗日ドラマ「風雲児女」の主題歌を国歌に指定しました。その歌詞は「奴隷になるな、われらの血と肉を持って敵の砲火に立ち向かえ、進め、進め」と歌われています。中国共産党は、中国人民に日本を永久に敵とするように教えているのです。恐ろしいことです。

日露戦争が終った明治41年に、ロンドンで世界道徳教育会議が開催されました。その会議で日本の教育勅語と修身が絶賛され、外国の人々はこぞって翻訳本を買い求めたといわれています。日清戦争、日露戦争に勝利し、あっという間に列強の一員となった日本の強さの秘密は、ここにあったのかと、各国列強は日本の国歌と教育勅語や修身の精神を手本にしたの

でした。

まさに教育勅語は、日本の「建国の精神」を謳った日本の宝でありました。万世一系の天皇を尊び、先祖、親、兄弟を敬い、義勇公に奉じるという、日本の国の精神こそが、悠久の昔から続く日本の宝でありました。

しかし、教育勅語と修身は、ＧＨＱにより廃止されてしまいました。アメリカは日本が強かった要因を、完全に消し去ってしまったのです。

それ以上に残念なことは、日本人自らが、この宝物を葬り去ることに加担したことです。日教組は最近まで国歌斉唱に反対し、国旗掲揚を認めず、教育勅語こそが国家権力を象徴するものだと反対しています。この思想こそが、今の日本を作った元凶なのです。

戦後、イギリスのサッチャー首相、アメリカのレーガン大統領は、日本の修身の教科書を自国の道徳教育として採用しました。アメリカで発売された「道徳読本」は大ベストセラーになりましたが、これは日本の修身の翻訳本でした。まさに昔の日本は、外国が手本にするほどの尊い国であったのでした。

今のままでは外国にやられる

昭和48年、いまから50年前に、おやかた様は《いまのままでは日本はロシアにやられる。ロシアはそういう腹、そういう計画を立てているんです。とんでもございません。でもみん

なが「みたま」になれば大丈夫》と教えました。

昭和54年には、《ロシアは今の日本を呆れてしまっている。日本の国は世界で一番の国だ。それなのに今の日本は恥ずかしい。このままでは、日本の国はロシアにやられる。あと50年したらロシアは日本をやっつけに来る企てをしている》とも教えました。

日本人が立派になるとは、「みたま」が磨かれた、本来の日本人に建て替わることです。そうすれば、必ず天が加勢すると教えたのです。まさに、日本を救うための「天祐自助」と「天祐神助」が求められているのであります。

世界道徳教育会議で絶賛された教育勅語や修身の精神を取り戻し、天皇を「千代に八千代に」と讃える日本人の心を取り戻すことが必要です。そしたら、日本は中国やロシアから、侮られることはなくなるのです。

国が危ない合図は巨大災害

国が危ない時の合図は、巨大災害です。今年の元旦に突如として、能登半島に大地震が発生し、多くの人が命を失いました。大自然はまことに酷であります。普段は、人間に恵みを与える豊穣な海や大地が、時として、人間を飲み込む、ヤマタノオロチに変貌するのです。能登半島は辰の形状に似ています。その地が辰年の正月元旦に大地震に見舞われました。これは大変なことを私たちに教えています。

近いうちに来るとされる、首都直下地震や南海トラフ地震は日本を滅亡させるほどの災禍をもたらします。南海トラフ地震では死者32万3千人、避難者９５０万人、首都直下地震では死者２万3千人、７２０万人が避難者になるという、予想数値が出されています。

ちなみに、阪神淡路大震災の死者は６５００名、東日本大震災は2万2千人でした。南海トラフ地震は阪神淡路大震災の50倍、東日本大震災の15倍の被害が予想されています。南海トラフ地震と首都直下地震は連動して起きやすく、二つ合わせた被害は想像を絶するものになります。静岡の御前崎に建つ「浜岡原子力発電所」の安全性も心配されるところです。

失う資産も莫大です。阪神淡路大震災では10兆円、東日本大震災では18兆円の資産が失われましたが、土木学会の試算によると、南海トラフ地震では資産被害は１７０兆円、生産施設の停止による損失は１２４０兆円、合計１４１０兆円、首都直下地震では資産被害は47兆円、生産施設の停止による損失は９５４兆円、合計１００１兆円と予想され、その被害は想像を絶するものになります。

建物の倒壊や火災被害がなければ被害を大幅に減らすことが可能と言われていますが、南海トラフ地震では、津波による死者は全体の8割とされていることから、死者の数を減らす効果は余り期待できません。結局、逃げる以外には助かる道はないのです。昭和58年以前の旧耐震基準で建てられている家屋は、震度5以上で倒壊する恐れが高く、現在の建物の3分の1はそれに該当しています。

東日本大震災では、避難した人の半数以上が、「精神的障害」を訴えました。亡くなった２万２２１５人の内、３７９２人が災害関連死でした。熊本地震では亡くなった２７６人の内、２２１人が災害関連死でした。過酷な避難生活によって命を失くしたのです。今回の能登半島地震では、現在までに、亡くなった２４１人の内、15人が災害関連死と報告されています。

これからも日本を揺るがすほどの国家的災禍が来ます。罪もない無辜の民が、沢山死ぬことが現実に起きるのです。助かったとしても、生きる力を失くしてしまう人が沢山出てくることでしょう。その人たちを救うために、生きる力の根源である「みたま」を知らせておかなければなりません。

私は阪神淡路大震災や東日本大震災の被害をつぶさに見て、復興に取り組んできましたから、このような災害が、日本各地で起きると、日本が滅亡するほどの危機に置かれることは容易に察することができます。

歴史が教える地震と戦争の連動

太平洋戦争は昭和16年の真珠湾攻撃で火ぶたが切られ、昭和20年の原爆投下を受け、日本の無条件降伏で幕を下ろしました。

その間に起きた地震は、昭和18年の鳥取地震（死者１０８３名）に始まり、昭和19年の東

南海地震（死者１２２３名）、昭和20年の三河地震（死者３４００名）、昭和21年の南海地震（死者１４６４名）と次々に発生し、最後は、昭和23年の福井地震（死者３７６９名）でした。本土襲撃という戦火の中、地震に見舞われ続けた日本の惨状は、筆舌に尽くし難いほどの惨劇であったことでしょう。

その後、戦争が終ってからの日本は、平成７年の阪神淡路大震災までの50年間、大地震は発生せず、戦争もなく、平穏な生活を送っていました。しかし、いま再び、国家を揺るがす程の外敵と地震が頻発する時代がやってきました。

明治維新、日清戦争、日露戦争の前後も大地震が連続して発生しました。幕末の嘉永６年には、ペリーの黒船が浦賀沖に来航し、開港を要求して幕府を脅迫しました。その翌年に日米和親条約が結ばれましたが、その年の暮れに南海地震と東南海地震が発生しました。次の年には江戸地震が発生し、その次の年には大型台風が関東地方を直撃し、合わせて10万人以上が亡くなりました。日清戦争と日露戦争の時期も、大地震が頻発していました。

そして、第一次世界大戦（大正３年から大正７年）が終った大正12年、いまから１００年前に、わが国の地震史上で最大の惨事を出した関東大震災（死者１５３８５名）が発生しました。

さらに、巨大地震と外国との有事が重なると、現在の日本人ではこの災禍を乗り越えることができません。現在、世界ではロシアによるウクライナの侵略戦争と、この戦争に並走す

る形で起きたイスラエル・ハマス戦争のさなか、中東のトルコ・シリアで6万人以上の死者を出した地震が発生しました。

北アフリカのモロッコでも地震が発生し、死者3千人以上を出しました。11月にはアフガニスタンの地震で2千人以上の死者が出ました。戦争の最中にこれらの地震が発生したことを重く受け取めるべきです。

生きぬく力

最後に、おやかた様の教えを紹介します。この御垂示は「行くに行けない、通るに通れない」時代に先駆けた天の啓示であります。

《天と地がいずれもめる。ところが浮世のお方は何にも知らない。だから後手をつく。そうすると死ぬより他に方法がない。いまに天地がもめて、私たちに大きな苦を見せる。だから浮世に思い方を教えてやれ。この国に生まれた自分たちを振り返れ》と教えています。

この末世の時代をどのように生きぬくか、それを「救いの理」として、次のように教えています。《これから死にたいという人が一杯増えるんです。だから、どうしてもお前たちが、「みたま」になって、浮世の人を抱いてください。このままでは沢山の人が死んでしまうんです。お互いさんが生きて、生きて、生きておおすんです》と教えています。

ロシアによるウクライナの侵略とイスラエル・ハマス戦争は、世界の安全保障と地政学的

脅威に重大な影響を与えており、中国と対立が激化している台湾と尖閣諸島については一触即発の危機にあります。巨大地震と外国との有事が重なると、現在の日本人ではこの災禍を乗り越えることができません。

しかし、私たちはこの危機を乗り越える力を持っています。その力こそが「みたま」の力であります。「みたま」は私たち一人ひとりの内に宿る、創造主神にまでつながる神秘的存在です。「みたま」の力を信じ、日本人の強靭化と、日本の国の強靭化を是が非でも達成しなくてはなりません。

そのためには、冒頭で述べた通り、戦後失われた「建国の精神」と「日本人のこころ」を取り戻さなければなりません。それにより、天の加勢を得て、日本の国が守られるのです。日本は天祐神助の国であるのです。

ここ福井の地は、維新の英雄たち、松平春嶽、橋本左内、由利公正など、日本のために尽力された多くの偉人がいらっしゃいました。まさに、天上からのご加勢をいただけるお国柄であると存じております。更なる皆さまのご活躍を期待申し上げて、私の話はこれで終えたいと思います。

日本の人柄

北畠親房

神奈川　髙越研次
東京　佐瀬康志
東京　柳田泰

＊後醍醐天皇の信任を得る

北畠親房は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した公家の一人です。著書の『神皇正統記』は有名で歴史家でもあります。後醍醐天皇の信任を受けて、嫡男の顕家（あきいえ）と共に南朝を支えて活躍し、その生涯を捧げました。

親房は村上天皇を源流とする村上源氏の庶流名門の出で、一二九三年北畠師重の嫡男として誕生しました。後醍醐天皇（一二八八～一三三九）の皇子である世良（つぎなが）皇子の養育係となりましたが、世良皇子が早逝（そうせい）した為、三十八歳の時に髪を剃り出家します。

コラム　南北朝時代とは？

建武の新政により鎌倉時代が終わり、室町時代が始まる前の時代。一三三六年（延元一・建武三）足利尊氏が北朝の光明天皇を擁立し、後醍醐天皇が吉野に移り南朝を開いた時期をその始期とし、和睦して足利尊氏により室町幕府が開かれるまで約六十年続いた。

＊奥州へ

鎌倉幕府が倒れ、後醍醐天皇による建武の新政が始まると再び政治の世界に復帰し、奥州駐屯を命じられた子の北畠顕家（あきいえ）に随行し、後醍醐天皇の第七皇子である義良（のりなが）親王（後の後村上天皇）を奉じて陸奥国多賀城に向かいます。

建武二（一三三五）年、鎌倉幕府再興を目指し

た北条時行（鎌倉幕府第十四代執権北条高時の子）が「中先代の乱」を起こします。その討伐に向かったのが足利尊氏でしたが、尊氏は鎌倉で建武政権に反旗を翻します。京都に向かう尊氏を追って、親房は顕家とともに奥州から軍勢を率いて上京し、新田義貞や楠木正成らとともに、尊氏を京都から追い出します。

さらに翌年一月には、摂津国で尊氏を返り討ちにして九州に追い落としましたが、その後、再び尊氏が勢力を得ると、後醍醐天皇は吉野に逃げます。親房はそれに従い、吉野に南朝をつくるために尽力します。この南朝樹立に最も政治的な手腕を発揮したのが親房だと言えるでしょう。

南朝といえば吉野山だけのように思われがちですが、親房はちゃんと伊勢の港を押さえており、南朝は此の港を経由して九州にも東北にも進軍しますが、それを進めていたのが親房でした。

延元三（一三三八）年に息子の顕家が足利方の高師直（こうのもろなお）の軍との戦いで戦死すると、親房は奥州で再び力を取り戻そうと考え、次男顕信（あきのぶ）とともに義良（のりなが）親王を奉じて伊勢の大湊から海路東国に向かいます。しかし、途中で暴風に遭い、義良親王や顕信の船は伊勢に漂着してしまいます。

一方、親房は常陸国にまで流されて、その地に上陸します。その後、親房は筑波山麓の小田城に入り、そこで『神皇正統記』の著述を始めたと言われています。

そして、興国四（一三四三）年に関城でさらに手を加えたあと、後村上天皇に献上しました。この後村上天皇は、以前、親房が奉じ、ともに陸奥国に赴いたときの義良親王でした。

コラム　後醍醐天皇とは？

○後醍醐天皇は、鎌倉幕府を倒して建武の新政を始めたが、足利尊氏に敗れて南朝を開いた。

○建武の新政では、朝廷の権威を回復しようとしたが、守護大名や武士の反発を招き、足利尊氏との対立が激化。

○足利尊氏に敗れて吉野に逃れ、南朝の皇統を継続したが、一三五二年に崩御。

＊神皇正統記

「大日本は神国なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を伝へ給ふ。わが国のみこの事あり、異朝にはその類なし。この故に神国といふなり」

（大日本は神国である。天祖国常立尊が初めてこの国の基をひらき日神すなわち天照大神がながくその統を伝えて君臨している。わが国だけにこのことがあって他国にはこのような例はない。それゆえにわが国を神国というのである。）

（「日本の名著9・慈円・北畠親房」中央公論社より）

という有名な一節から始まります。

これは天照大神の正統な末裔である天皇によって日本という国が続いてきているのだと宣言しています。

この本の最も重要な点は、史観です。北畠親房がどのような「歴史観」を持っていたかということです。「大日本は神国なり」といって、日本が神話の時代から続いているのだということを、『神皇正統記』は明快に述べています。

渡部昇一氏は次のように述べています。私は旧制中学校のときに『神皇正統記』を習いました。よく教えられたのは「言語は君子の枢機なりといへり」という言葉です。これは『易経』にある「言行君子之枢機」からくる言葉で、君子は日頃から言葉と行いにくれぐれも気を付けなくてはいけない、という意味です。上にも述べたように、建武の中興に当たっては、武士たちが自分の手柄を口々いいたてたのです。「わが功におきては日本国を賜へ、もしくは半国を賜はりても、足るべからず」（自分の立てた功は日本国すべてをもらっても、あるいは日本の半分をもらつても足りない）などと勝手なことをいっていました。

しかし、「堅き氷は霜を踏むより至る」というように、堅い氷もわずかな霜が降り始めた頃から下地ができて徐々に堅くなるのです。だから、政権がしっかり固まらないうちは口を慎まなければならなかったと親房はいっているわけです。

乱臣賊子といわれる人たちも最初から悪人であったわけでなく、慎むべき言葉を慎まなかったからそうなったのだ、そして、自らの功を自慢してなんでも欲しがるのは君子ではないといって、

親房は「言葉は君子の枢機なり」といっているのです。勝手ばかりいっていると世の中が乱れるというのは、いつの時代も変わりません。

（『名著で読む日本史』渡部昇一著より）

神皇正統紀は当時の武士に広く読まれていたほか、江戸時代には水戸の徳川光圀に高く評価され、光圀が編纂を始めた大日本史の中で南朝を正統とする思想が受け継がれることになりました。山鹿素行、新井白石、頼山陽らの史家にも大きく影響を与えています。その思想は尊王攘夷運動や倒幕運動へ発展していくことになります。私はさらに明治天皇の教育勅語の中にも親房の考えが影響していると思われます。

コラム　神皇正統記の歴史的意義と特徴

○神皇正統記は、南北朝時代の混乱期において、後醍醐天皇や尊王攘夷の思想を支持する北畠親房によって著された天皇家の正当性を強調した重要な歴史書。後世においても天皇の制度や皇統に関する考え方に影響を与えた。

○南北朝時代の武将としての北畠親房の歴史観や政治思想を垣間見ることが出来る貴重な資料であり、日本の歴史研究や文化理解において重要な資料と位置付けられている。

＊晩年

正平三年（一三四八年）に四条畷の戦いで楠木正行ら南朝方が高師直に敗れると、南朝は吉野から更に山奥深く落ち延びます。その後、観応の擾乱で足利尊氏が南朝に降伏して正平一統が成立すると、これに乗じて親房は一時的に京都と鎌倉の奪回にも成功します。正平九年（一三五四年）四月に賀名生で死去、享年六十二歳でした。その後、南朝は衰退していきます。

最後に私の感想は、太平洋戦争後北畠親房をすっかり忘れ去られていることです。今の学生に北畠親房はほとんど知らないでしょう。入学試験にも出ることはないに違いありません。これは舶来式の戦後アメリカによる民主主義、天皇の象徴化によって、すっかり日本古来の「神皇正統記」は無視されているといってもいいでしょう。改めて天皇を中心とした日本の歴史日本の文化を見直す必要があると思うのです。民主主義が必ずしもいいわけではないと思います。もの金でない、地位もいらない親子ともども天皇に尽くした生き方を、北畠親房に感じるのです。

図書室にあります

理と伝説

濡れ衣（ぬれぎぬ）の理（り）

三重　箱田増実

・濡れ衣（伝説）
・筑前の守の出家
・昭和34年８月14日（金）濡れ衣の理

濡衣塚

無実の罪を着ないようにしてはいかん
罪を着るのは平気

濡れ衣（伝説）

博多と箱崎とを隔てる石堂（御笠）川の東岸、石堂橋のほとりに梵字を刻みこんだ濡衣塚がある。

奈良時代、聖武天皇（７２４～７４９在位）の頃、佐野近世とゆう人が筑前の守護として下ってきたが、都から連れてきた妻を失い、この土地で後妻をめとった。

先妻との間に春姫とゆう娘がいたが、継母はこの娘を憎み、亡きものにしようと企んだ。そして、漁夫に金品を与えて偽りの訴えをさせた。

「都の姫君が夜になるとわがもとに通われ、釣衣を盗んで行きます。お返し下さい」とゆう漁夫の声に、近世は驚いて春姫の寝所をのぞいて見ると、濡れた衣を被りながら眠っていた。濡れた釣衣は

継母が眠っている娘に着せかけたものであったが、後妻の悪計と気づかなかった近世は、春姫の言い訳を聞こうともせずに斬り殺した。

その年が暮れ、ある夜の事、春姫が父の夢枕に立って二首の歌を詠んだ。

「濡れ衣の袖よりつたふ涙こそ
永き世までの無き名なりけり」

（貝原益軒の『筑前国続風土記』では下の句「無き名を流すためしなりけれ」となっている）

「ぬぎ着するそのたばかりのぬれ衣は
永き浮名のためしなりけり」

（「たばかり」は計略を用いて騙すこと）

近世は夢から覚めて春姫の無実に気がついた。不明を悔い、妻を離別し、肥前の松浦山に入って出家した。後に、松浦上人と呼ばれる名僧になったとゆう。一説によると、佐野近世は娘の供養のため、石堂・萱ノ堂・奥ノ堂・普賢堂・瓦堂・脇堂・辻ノ堂の七堂を建てたとも伝えられ、七つの堂の名は、今も、博多に地名として残っている。

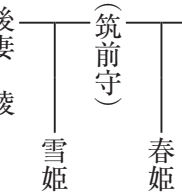
この説話が書かれた最初の文献は、寛永18年（1641）に出された『雑話集』とゆう本で、無実の罪を受けることを「濡衣を着る」ともいうが、この故事によるともいわれる。

筑前守の出家　濡衣塚

寛永18（1641）年版の『雑話集』とゆう古書にある。『聖武天皇の御時、佐野の近世と言ふ人、筑前守にて下りしに―』

聖武天皇の御在位は、神亀、天平、天平勝宝などの年号のある724～749年である。

わが国の国名だった大倭国を大養徳国に改めたり、ふたたび大倭国にもどしたりしたのはこの時代だし、九州では天平12（740）年に大宰少弐藤原広嗣が太宰府に挙兵して反乱を起こし、やがて大野東人のひきいる政府軍によって鎮圧されるとゆう事件があった。



佐野の近世が筑前守に任命されて九州に下向したのは、多分、そういう時代だったのであろう。この時、近世は病身な妻と、年頃の娘とを連れていた。

ところが長い道中の疲れもあって、筑紫に着くと間もなく妻は病床の人となった。その頃の役宅は博多湾を臨む海に近い所にあったようである。近世は、日夜寂しく波の音を聞いている妻の病床を訪ねて、都からの便りなどを読み聞かせてやったりして慰めると、

「お心づかい有り難うございます。でも、私の生命も、もう長い事ではございませぬ。只、春姫の事は、くれぐれもお頼み申しておきます。あの子は、ご存知の通り、幼い時から歌の道を一心に学んで、心の美しい子でございます。きっと、良い婿を迎えて、幸せに暮らすに違いないと思いますが、それまで生き長らえておられないのが、ただ一つの心残りでございます」

「そなたの身体が、このように弱るのを知っておれば、筑前守など、お受けするのではなかった」

「いいえ。おのこは出世が第一でございます。おなごの事などお気にかけなさいますな」

心優しい妻の言葉に、近世は涙ぐむ思いだった。

その妻は筑紫に下った年の暮れに亡くなった。

近世は遺された娘の春姫を妻の身代わりのように愛して、日に〳〵美しく成長するのを楽しみにしていた。

役所では、

「遠国の暮らしに、独身（ひとり）では不自由です。是非、後添いをおもらい下さい」

「筑紫でも、都に負けない美女がおりますよ。お世話させて下さい」

などと勧めてくれるのだが、近世は笑って相手にしなかった。

近世の胸には、それほどの美貌とゆうのではなかったが、心優しい妻の面影が生きていたのであ

る。

この辺りで、歌会と呼んでいる歌垣が行なわれたのは、翌年の早春の頃だった。後の世に三宅と呼ばれた小高い丘に、数百人の男女がいく組にも分かれて群れ集まり、ある群れは掛け合いで歌ったり、ある組は群唱したり、あるいは力技に汗を流したり、様々に遊び戯れていた。

筑前守佐野の近世は心利いた部下を一人だけ伴って丘にのぼり、歌垣の群れの中をそぞろ歩きしている内に、ふと足をとどめた。群舞している男女の中央に立って、歌っている女が目にとまったのである。

大柄な、実に健康そうな若い女である。上衣からはみ出ている胸は白く、光溢れる太陽の下で、紅潮した顔は歌自慢の誇りに輝いている。張りのある美しい声である。近世はこれまで、こんな健康な美とゆうものを見た事がなかった。

ほっそりとした美しさ、淡い雪のような白さ、ふわりと浮いてくる春の蝶のような優しさ、都の美しさとゆうのは、それだった。しかし、この女の美しさは違う。溌剌とした美である。脳天に打ちこんでくるような激しい豪奢な美、南の国の奔放な美に接して、近世は吾を忘れて茫然と見とれた。

先方でも近世を見とめたようで、にっこり笑った。途端に近世は目がくらんで、足もとが乱れた。

やがて歌が止み、踊りの輪がくずれた。近世は吾に返ると、ふうーっと太く吐息をついて、部下に尋ねた。

「あの歌い女、何と申すぞ」

心利いた部下は、近世が見とれている間に近くの者から聞き出していた。

「この村の村長の娘で、今は主人に死別して、一人娘を連れて里に帰っておる女です。綾と申すそうです」

日ならずして近世がこの出戻りの女と結婚した事は、勿論である。

爛熟とゆうべきか、力の満ち溢れた筑紫女の情熱は、たちまちにして都の男を打ちのめし、柔肌の擒にしてしまった。近世にとって、先妻のつつましい愛は、ひどく頼りないものに思われ、身体で示す綾の愛こそ無上真実のものと信じるように

なった。教養のある都育ちの男は哀れだった。

同じ様に筑前守の妻になった綾も哀れだった。主人が亡くなったために婚家を去るときに、一人娘も一緒に連れて出たのだが、今の綾の悩みはこの娘、雪姫の事である。名前に似合わず色黒で、先妻の子の春姫にくらべると、姿も容貌も段違いに劣っている。

近世が何かにつけて気を配っているのは春姫である。都から衣類を送ってくると、まず綾に与え、次は春姫、雪姫の方は振り向きもしない。綾は次第に春姫が憎くなった。春姫さえいなければ、筑前守の気持ちもすこしは雪姫に向くであろうものを、と思い込むようになった。

この土地の者である綾には、山にも海にも心安い者が沢山いる。密かに綾が呼び寄せたのは近くの若い漁夫である。その男に銭やら布類やらを沢山与えて頼んだ。初めの内は、とてもそんな事はできぬ、と断っていた漁夫も、山と積まれた高貴な品を渡されると、しぶしぶながら承諾した。

その翌日の早朝である。家の外で何やら大声にわめく者があるので、綾が戸を開けてみると、若い漁夫だった。

「お宅の姫が、昨夜、わしの家から帰りがけに、わしの着物を持って行かしゃった。わしは今から漁に出るので、あの漁着がないと困る。早う返して下されい」と、怒鳴っている。

何の事やら、訳の分からぬ話なので、近世が家に入れてやると、漁夫はどもりながら訴えた。

近頃、この家の春姫が忍んで来るので、懇ろにしているが、夕べはいたずら心からだろうが、自分の漁着を着て帰られた、返してもらいたい、とゆうのである。

驚いた近世が春姫の部屋に飛んで行くと、姫は蒲団の上に、若い漁夫の云う通り、裾の方が濡れた漁着物を掛けて寝ていた。これは、夜の内に綾のした事だが、

「この頃、春姫の挙動に不審な事が多く、気にかかっていましたが、こんなみだらな事をしているとは存じませんでした。筑前守様のお名を汚す悪事を働くとあっては、許してはなりませぬ。いいえ、綾が許しませぬ」と煽られると、近世は身体を震わせて激怒した。

やにわに刀を抜くと、何やら事情も分からずに、あっけにとられている春姫を斬り伏せてしまった。続いて、訴えて来た漁夫も斬り殺された。

この惨劇に結末がつくのは、一年後の春姫の祥月命日である。

その夜、佐野の近世が、後妻の綾と床を並べて寝ていると、夢に春姫が顕れた。

夢の中の姫は先妻と手をつないで、どこか都の寺らしい門をくぐって出てきた。門の外に近世が立っているのを見とめると、いつものように美しく微笑して、一枚の紙を渡した。近世がそれを見ようとすると、母も娘も、何も云わずに近世の前を通り過ぎて、次第に向こうに遠ざかってしまった。

二人の姿が消えて、近世は吾に返った思いで紙を見ると、それには一首の歌がしたためてあった。

「濡れ衣の袖よりつたふ涙こそ
無き名を流すためしなりけれ」

はっとして目がさめた近世は、二度三度と夢の中の歌を口ずさんでいるうちに、

「そうだったのか」とつぶやいた。

綾の奸計（悪い計画）だった事に気がついたのである。しかし、綾の仕業であったにしろ、彼女の愛にのめりこんでいて、それが看破できなかったおのれこそ、一番の愚か者だったと悟ると、その朝、後妻を離別した。

数日後、世の無常を悟った佐野の近世は出家遁世の志を立てて、筑前守の館を発つと、いずこへともなく去って行った。

この哀れな春姫の供養碑が博多の東部、石堂橋のほとりに安置されている。北朝年号の康永３（１３４４）年８月の建立で、博多では「濡衣塚」とよばれている。

思いがけなくも無実の疑いをかけられることを、濡れ衣を着るとゆう。その語源は、この伝説に拠るとゆう説がある。

（参考　佐々木滋寛著『筑前の伝説』）
『日本の伝説33　福岡の伝説』（角川書店）より

［この話に相応する天の理、お言葉］

己があったら　己に勝てる己をつくる　これが人生の『こく』（極）である

（教の泉219頁）

怪しげな人の心の奥底に　何があるのか
おこ〳〵さんだよ
（時が来たら　人は皆　心の建て替えするらしい）

（同65頁）

時が来たら、天から、先祖さんから、「起きよ〳〵」と、自分の、前生の因縁を見せつけられて、自分の奥に目覚めて、心の建て替えをする方に、催促されるようになる。それが日本人のみたまさんの生長の順序である。

昭和34年8月14日（金）

濡れ衣の理

無実の罪を着ないようにしてはいかん
罪を着るのは平気
早く大人になりや　無実の罪を　着ないようにしてはいかんで
罪を着るのは　平気でないといかん
〝無実の罪でも　場のため　道のため
　やかたのために　着る位の方があったら
　私は　ほう〳〵〳〵やがな〟と言う
無実の罪を着るのが嫌なら
ほーとも　ふーとも　へーともならん
〝いずれ　たまらんことや　迷惑がかかるという時に　知らん顔していたら　やかたが解決つける〟と思う人の集まりである
それでは　やかたは　みっともないことになる
みっともないことはしたくない
この道は　ご苦労な上にも　ご苦労さんのお揃いと
こう言うそうである
ただの苦ではない　真に骨身にしみた苦がある筈でございます
だから　そういう風に言う　すると
〝やかたかて　骨身にしみ通る　苦の苦を通ったんだろう〟と分かれば結構
〝骨身に沁みる苦を通らんでは　人の上には立てんで〟こう言う
〝骨身に沁みる苦を通らんと
色々かいろ　分かったんでは
これは　人の上に立てよう筈がない
人がついて来よう筈がない
まあ　一人の人をも　納得させられんがな〟と
これが道でございます

〝真に骨身にしみる苦だから
ご苦労さんの上にも　ご苦労さん〟とこう言う
一重位の苦ではない　二重も三重もの苦でございましょう
これは皆さんも　〝ハイ　承知しております〟
承知の上なら　何にもない筈
追われて〳〵　追われ倒して　逃げ腰の苦であ

るとすると　嫌じゃ〳〵　嫌じゃで　嫌々ながら
通る道
　そうではなくて
〝一歩前進　一歩　人より先に行こう
苦は　先を行きましょう〟というような
この思いになって貰ったら　やかたは
まず〳〵　骨身にしみる
私が骨身にしみて嬉しい
私が骨身にしみて嬉しいなあというように
先ず　なりたいのでございます

【注】骨身に沁みる苦…一山　二山越えたとて
人の芯にはなれんぞよ　十山越えてもまだ
なれん　なんでなれんと云おうかな　艱難
すこしは身に沁みて　死んでみなくばあか
んぞな（教の泉40頁）
　濡れ衣の理を立てて通るとは、自分が死ぬとゆう思いを試される。向井女のことを思うべし（『矛盾を超えて』参照）。自分〳〵とゆう臭みを抜く過程なり。灰汁（あく）抜きでもあると云えましょうか。

大和撫子

野村望東尼（のむらもとに）

神奈川　芹澤和彦

「野村望東尼（のむらもとに）」の名を現代人の多くは知らない。知る人は福岡県人か、九十代の高齢者であろう。戦前生まれの人ということになるが、どうして多くの人が知っていたのでしょう。その答は、昭和十七年に選定された「愛国百人一首」にあるといってもいいでしょう。その選定基準は、

1　愛国の精神が、健やかに、朗らかに、積極的に表現されている歌であること。

2　愛国の意義を広く理解し、親子・夫婦・国土・風物を愛でる歌もよいとすること。

であり、全国民が愛誦する古歌を新聞社が募集し、集まった数百首より、歌人、史学者が選定したものである。

昭和十九年七月サイパン島全滅、八月テニヤンとガム全滅、戦争も敗色のかげりが出て来たころ、当時四十四歳の松木草垣女史（おやかたさま）は、色紙に佐久良東雄（さくらあずまお）の一首を書かれた。

天皇（おほきみ）に　仕えまつれと　我を生みし
　わがたらちねぞ　たふとかりける

添え書きに「大東亜戦争の完勝を祈りて」とある。

私は、当時平凡な主婦である方が、このような添え書きで意思表示をされる姿に感動したのですが、同時に、なぜ佐久良東雄などという、よほど歴史に詳しい人でなければ知らない人物の歌を好まれたのか、不思議でなりませんでした。

四十年以上分からなかった、その謎が解けたの

は、佳子教主様が亡くなられて一年以上たった平成二十五年一月のことでした。教主様のお屋敷の整理をしていたときのことです。高く積まれた手本や用紙の山から、ひょこっとその色紙が出てきたのです。

そして三月、長くかかったお屋敷の整理も最終日になりました。なんと不思議なことに、思いがけないところから、古ぼけた本が一冊出てきました。びっくり仰天、「愛国百人一首色紙」とあるではありませんか。昭和十八年出版、定価八円、日本文学報国会とあります。その本の七十七番に佐久良東雄の歌がありました。

望東尼の歌も「愛国百人一首」の九十八番にあります。道友皆が共感を持つ歌です。

ものゝふの　やまと心を　より合わせ
ただひとすじの　大綱にせよ

歌意は、武士はすべて、綱をより合わせるように、大和心をより合わせて一筋の大綱として、回天の事業に一致協力しなさい、ということである。

ちなみに望東尼がよく面倒をみた、長州藩士高杉晋作の歌は百番に載っている。

野村望東尼は、福岡藩士、浦野重右衛門勝幸の三女として福岡城下に生まれた。名を「もと」という。父の勝幸は馬廻組の藩士だったが、東山流の挿花の名人であった。もとは十三歳のとき、家老の林家に行儀見習いにゆき、十七歳のとき初の夫である郡利貫に嫁した。彼は五百石取りの藩士で、浦野家より知行が二百石も多かった。もとは利貫が二十歳も年上だったので気がすすまなかったが、母のミチが「お父様も私より二十一歳も年上だったのよ」と言うように、両親がうれしそうに勧めるので、利貫に嫁した。

若いもとが嫁ぐと家中が明るくなったが、利貫は新妻のもとに笑顔を見せることなく、もとと睦み合うことも、あまりなかったようである。それどころか、もとの下働きをさせるために伴ってきた下女のスエに手を出し、妊振させてしまったのである。

スエの懐妊を知ると、もとの我慢の緒は切れて、利貫の城からの帰りを待たず郡家を出てしまった。

もとは、どんなに両親に論されても郡家には帰る気にはなれず、熱を出して寝込んでしまった。しかたなく藩庁に離婚の申請をした。利貫が承知しなければ離婚は成立しないのだが、懐妊しない病弱な正妻など邪魔な存在としか思えなかった彼は承諾したのでしょう。

離婚が成立すると、もとは歌詠みになりたいと思った。一度は父に反対されたが、もとが二十二歳のとき、父の勝幸が亡くなり、母のミチに再度懇願すると不幸続きのもとを見かねてミチは、願いを許した。もとは、父の弟子であった二川松蔭の次女滝子に頼み、彼の門下生となった。

二川松蔭は、楠正成の奉者で、門下生は男性が多く、女性は松蔭の娘二人ともとの三人だけだった。

翌年の正月、もとにとって初めての歌会が開かれた。歌会では詠み人の名を伏せた歌の短冊が、参会者の間を巡る。その中より、参会者は一首を選び、感想を述べ合った後、師の松蔭が天・地・人の三首の入選作を決める。もとの歌を選んだのは、三十代と思われる藩士と町人であった。この藩士こそ後の夫となる野村貞貫であった。二人の間を取り持ったのは滝子であった。最初の歌会で二人の心は通い合い、翌年滝子の姉の鶴子を通して再婚の申し込みがあった。もとは初めての歌会のこともあったので、なんのためらいもなく応諾の意をもったが、母のミチは大反対である。

「相手の貞貫さんは、あなたよりひとまわりも年上で、しかも先妻の残した息子が三人もおるというではありませんか。それも十七歳、十三歳、十一歳と多感で難しい年頃なのに、それでもよいのかね」

もとは、歌をとおして貞貫の人柄をよく分かっていたので自信をもってこたえた。

「三人のお子様はじきに巣立っていきます。それに貞貫殿は、他の女に手をだすようなお人ではありません」

これには、ミチも返す言葉がなく、歌の師匠松蔭の媒酌で再婚することになった。

貞貫は、楠公を尊崇し、尊王の心も厚く、もとは、そんな夫と共に、歌詠みの道をたどりながら、勤王の道を歩むことになるのである。

二人の結婚生活は心の結び付きからいったら、幸福そのものであるといえよう。夫婦仲はよく、ほどなくもとは懐妊する。先妻の子は三人とも男なので、女の子が生まれるように祈った。祈りが通じたのか、女児が生まれた。しかし喜びは一瞬に消え去った。翌朝、乳を飲ませようとしたとき、赤子は既に冷たくなっていた。二ヶ月早く生まれたためか現代医学なら育ったであろうが、当時としては、救えなかったのでしょう。

悲劇は続く。体を回復したもとは、二人目、三人目と女児を授かったが二人とも早産で、翌日には冷たくなっていた。三人も続けて愛する子を失った妻を励ます為に、夫の貞貫は、歌に専念するよう勧める。松蔭の門を離れて三年が過ぎている。もとは放心状態で気がのらない。そんな妻のもとも、貞貫の一つの言葉に心を大きく動かす。

「大隈言道（おおくまことみち）が歌門を開くというてきた。気晴らしにいってみたら」

大隈言道は、もとが二川門下であったとき、初めての歌会で彼女の歌を評価した二人の男のうち、一人は夫となる貞貫で、もう一人町人姿の男、それが大隈言道だったのだ。

不思議な縁ともいうべきか、もとが二川門下随一と尊敬していた言道なので、早速入門を決めた。言道は「歌はただ花鳥風月を詠むものではない。それを種にして己の心情を語るもの。自然への慈愛を持ちながら内省や世相への思いを詠むものだ」と言う主張で、もとも強く共感を覚えた。

大隈門下で歌詠みに専念して三年め、もとは、またまた四人目の子を生んだ。女児であったが、やはり早産で、一日の命であった。

ただ一夜　世にあらむとて　生ひいでし
　子は何事の　報ひなるらめ

この歌は、久々に出席した歌会で、最高のできとされ、門下の仲間に「もとさんでなければ詠めない」と讃えられた。

もとの悲劇は、連続して愛児をうしなっただけではない。先妻の子で隅田家に養子として入っていた三男の雄之助が同僚との不和から突如出奔してしまった。隅田家は知行を没収され、断絶して

しまう。そればかりか、野村家の長男（先妻の子）貞則が鬱病を発し、寝室で家宝の刀で割腹自殺をしてしまったのだ。家督相続は貞則の嫡男の十一歳、貞和が認められたが知行は、三百三十石に減らされてしまう。

このような、人生の大きな苦を次から次へと経たからこそ、望東尼の歌が深く心に響き、周囲から絶賛されていったのでしょう。

さて、望東尼が勤王歌人と呼ばれたのは、なぜでしょうか。それは沢山の尊王攘夷や討幕の志士達を匿（かくま）い支え、命の危険も顧みず援助を惜しまなかったからであります。次の一首が端的に彼女の心境を語っています。

うき雲の　かかるも嬉し　もののふの
やまと心の　かずに入る身は

「疑われてもかまわない、大和魂を抱く志士のひとりに数えられるならば」と、堂々と歌うのである。

もとの夫の貞貫は、雄之助の出奔後は城中で同僚に合わす顔がなかった。妻のもとも主婦の座から解放し、歌道に専念させてやりたかった。そこで近くの平尾山のふもとに山荘を建て、妻と二人で静かに余生を送ろうとした。山中には楠公の祠があったので、参拝者の多くは貞貫の山荘を訪れた。

安政四年（一八五六年）、平尾山荘での歌会の最中に、突然ボロボロの格好をした平野国臣が訪れた。

「拙者も少々歌を詠みます」と言って書いたのが、

我が心　岩木と人や　思ふらむ
世のため捨てし　あたら妻子を

もとが「離縁して妻子をお捨てになられたのですか」と問う。ここで国臣は、勤王思想をとうとうと展開するのであった。もとは国臣に強く心をひかれた。

安政六年、夫の貞貫が六十六歳の生涯を閉じる。もとは途方にくれたが「私には歌が有る」と、第二の人生を歩むことになる。武家の寡婦の習いとして菩提寺で髪を下ろし望東禅尼（ぼうとうぜんに）となった。

周囲は、本名が「もと」なので「もとに」と呼ぶようになったが、本人自身は「ぼうとうに」が、よかったらしい。

ひとり残されたもとは、呆然となったものの、歌があったのが幸いした。亡き夫の遺稿集を作ろうとし、師匠の大隈言道に指導を仰ごうとした。三年前から大阪に移り住んだ言道は、今や京・大阪では広く名を知られた歌人であった。

望東尼は上洛を決意した。しかし、友人や親類は大反対である。文久元年（一八六一年）と言えば、大変な年である。前年の万延元年には、大老の井伊直弼が殺され、皇妹和宮が家茂への降嫁との決定があり、世の中は勤王だ、佐幕だ、攘夷だ、討幕だなどと騒乱のるつぼの京都へ女一人で行くなんて、あまりにも無謀である。「京には名だたる歌詠みが沢山居り、上洛は長年の私の夢、それに老い先短い身、何があっても平気よ」と意志を貫いた。

十一月に福岡を出て、途中兵庫に上陸し、楠公を祀る湊川神社に詣で、十二月には大阪に着いた。師匠の言道に会い、遺稿集作成の指導を依頼する。言道は、大阪での歌の指導に福岡の弟子の歌を使っていたので、望東尼の名前は現地では、よく知られているという。言道は、歌人としての人脈を持ち、京都の有名な歌詠みを紹介してくれた。

その中の一人が宮廷歌人として知られた近衛家の村岡局である。村岡は十三歳から長い間近衛家に仕え、将軍家定に嫁いだ篤姫（島津篤子）に従って江戸城に入った女傑である。望東尼と村岡の二人は、歌をとりかわし、村岡の誠実な歌に感激する。

京都では高名な女流歌人に、太田垣蓮月尼（おおたがきれんげつに）がいる。彼女は出家して「蓮月焼き」という自作の歌を書いた陶器を作って暮らしていた。歌もすごいが、歌ではなく、梅田雲浜や梁川星巌など、安政の大獄で処罰された勤王の志々たちの話に衝撃を受けた。望東尼は、このままずっと京都にいたかった。

一方、福岡はたいへんなことになっていた。渦中の人は平野国臣である。彼は藩主の黒田長溥（ながひろ）が、江戸へ上ることになっているのを直接説得し、播磨の大倉から急遽帰藩することになる、ということが起こったのである。藩主としては、国臣ふぜ

いの輩の提言などを聞かざるをえないことに複雑な思いをしたに違いない。長溥公は、島津家からの養子であり、誇り高い人ですから脱藩した志士の直言に不快感をもったのは当然かもしれません。しかし、心配する望東尼の思いなどには頓着せず、国臣は、過激な行動をとり続ける。安政の大獄で追われた僧月照を西郷隆盛と共に薩摩へ逃がすことをするなど大胆な行為である。

文久二年五月、国臣は下関で捕らえられ福岡に送還され獄に繋がれた。望東尼は、「生きて牢を出られればよいが」と心配し、歌を送って国臣を励まそうと福岡に帰ることにした。

たぐひなき　声に鳴くなる　鶯も
　籠（こ）にすむ憂きめ　見る世なりけり

国臣を鶯にたとえ、美しい声の鶯が籠に閉じ込められ、自由に世論を語ることが出来ぬ世の中になってしまったなあ、と嘆く歌である。その後、二人の歌のやり取りは、長く続く。

文久三年三月、突知国臣は放免される。筑前勤王党の志々たちが、国臣の功を訴え朝廷を動かしたからである。牢から解放され、体が元に戻ると、国臣は、またまた八面六臂の大活躍をする。しかし、やり過ぎたか「生野の変」で二千人の兵を擁して決起したが、幕軍に敗れ、鳥取へと逃げる途中捕らえられてしまう。そして、京都の六角の獄舎に繋がれてしまった。運の悪いことに、その四ヶ月後、国臣は惨殺されてしまうのである。七月の蛤御門の変で、京都は三日間燃え続け、六角獄舎も延焼しそうになり、急遽獄内にいた三十三人の処刑をしたのである。国臣の辞世を見た望東尼は、嘆きの歌を詠む。

かねてより　君に代われと　祈りつつ
　老が命を　神はうけずや

京から戻ってからは、望東尼が夫と花島風月を楽しんだ平尾山荘は、志士たちの交流の場となり、絶好の隠れ家ともなった。元治元年（一八六四年）十一月、長州の高杉晋作が福岡へ亡命してきた。長州の藩論が真っ二つに別れ、俗論派に捕らえら

れれば命はない。名も谷梅之助と変名を使い、福岡藩の尊攘派の中心人物月形洗蔵により、平尾山荘に匿われた。二十六歳と若く理想に燃える晋作を、望東尼は母の様に、姉のように慈しんだ。梅之助の名前から、晋作が梅の花が好きだと知って、歌を送る。

冬深き　雪の内なる　梅の花
　埋もれながらも　香やはかくるる

動けば疾風迅雷、十日の滞在から晋作が長州に戻る際、望東尼は、徹夜で羽織りや襦袢を縫い上げ、旅立ちの支度をした。

慶応元年（一八六五年）は、望東尼にとって最大の悲劇が起こる。「乙丑の獄」である。当時、諸藩は勤王、佐幕、攘夷などと、藩内がまとまらず、血で血を洗う抗争で大混乱するところが多くあった。福岡藩は、藩主は公武合体派だったが時流の勢いより、初めは勤王、後になって佐幕と揺れ動いたため勤王派は大弾圧を受ける。月形洗蔵以下十四人が斬首、家老たち四人は切腹。処罰されたのは百四十人。その中に、たった一人の女性、望東尼その人である。志士隠匿の罪で玄海の孤島、姫島に流罪となる。女であり、出家していたため斬首にならずにすんだのである。

六畳半ほどの囚屋には、畳は無く板敷である。南側は角材の荒格子で紙も布も貼っていないので寒風がまともに当たる。年老いた望東尼にとって苛酷な住まいだが、彼女には歌がある。

暗き夜の　囚屋に得たる　灯火は
　まさに仏の　光とぞ見る

生き地獄のような牢生活も十ヶ月程が過ぎた九月十六日、早舟に乗った六人の武士が上陸した。脱藩して奇兵隊に入隊した藤四郎と志士の面々で、晋作の命令で望東尼を救いに来たのだ。はらはらしながらも偽の赦免状を使って脱獄に成功する。

下関に着き、二年ぶりに再会した晋作は、喀血し、重い病の床にあった。望東尼は、愛妾おうのと共に看病した。晋作は思いやりのある男で、おうのに対しては「俺の死後は墓守りになれ」と言

うし、望東尼に対しては、藩主に申請し、毛利公からは二人扶持の下賜が伝えられた。二人扶持といえば、毎年米十俵を頂くこととなるから、福岡の親類に援助を請うこともなく生活していける。

おうのと二人で懸命に看病しているところへ、とんでもないことが起こる。萩にいた晋作の正妻雅子が、一人息子を伴ってやってきたのです。妻と愛人が対面することになったのです。わずか八十余名で長州藩の正規軍二千人を相手にしたとき、泰然として豪胆ぶりを発揮した晋作もこれには弱り抜いた。そのピンチを救ったのが望東尼である。彼女は幾多の困難を通り切った経験から、二人の女心により沿って仲を取り持ち難局を乗り切る。晋作の死が刻々と迫るある日、床の彼が歌を書くと言って、

おもしろき　こともなき世を　おもしろく

と、上の句を詠んだところで力つき、

すみなすものは　心なりけり

と、下の句を望東尼が詠んだといわれている。

晋作の死後、七ヶ月ほどして望東尼も後を追うようにして六十二歳で亡くなります。その十日後、彼女が戦勝祈願に天満宮に断食参籠して、待ちに待った討幕軍、薩長の連合鑑が三田尻港（山口県防府）を出港していく。

明治二十四年、その功を賞して正五位が贈られた。

参考書
「流人望東尼」　小石房子（作品社）
「日本をつくった女たち」　仙堂　弘（水曜社）
「月神」　葉室　麟（角川春樹事務所）
「潔い女は美しい」
　杉本苑子・ジェームス三木（致知出版社）
「国魂」　西内　雅（錦正社）

つれづれ

お言葉との出会いの毎日

旭川　河合良明

――一日も早く、おやかたさまの思いに添わなければ、と思っていましたら、簡単に自分を見つめ、建て替えられる、お言葉に出会いました。

実行しましたら、如何に自分が甘いか、いやなクセがあるか等、至らぬ点が浮き彫りになりました――。

『毎日帳面につけて整理を』

（根17号・S48年3月21日）

でね、兎に角、さあもう、身を削ぐという事をね、そんなの何でもないでしょう。でね、何時もね、夜分お休みになる時にね、そういうご自分の気持ちに対してね、その答えをね、

〝今日は俺一寸、不だったなあ〟とかね、

〝今日は、意義があったなあ〟という事をね、一つね、いち〳〵帳面にお付けになったら、どお？そしたらね、

〝あっ、こんな事では、不の日の方が多いわ〟っていう事に、（普段）なっているんですね。それでは、お恥ずかしい事になるって言うんですね。それですからね、どーもね、仰ることがね、

〝足らん〳〵〟という事ばかり繰り返し〳〵仰るんですよ。どうぞね、〝ああ、今日は本当に意義があったなあ〟という日が、次々とあってほしいですね。で、毎日帳面に付けるんですよ。日付を書いて〝今日はどうだった〳〵〟ってことを、簡単に、チョッ〳〵〳〵と書くんですよ。それを忘れちゃいけませんよ、ね。

――即、実行しました。三十数日間、毎夜帳面に一行か二行書いて、読み返したら、甘い自分に

愕然です。

親を思う、喜ぶ、良い事を思い、言う、人の良いところを戴く、人様の嫌な事を見たら即座にお詫び、自問自答、道（場）を思う、自己中心でなかったか、不な思いをしなかったか、人のアラ探し等を、思い出して記帳しています。

それらを読み返しますと、自分のクセ（業）、至らない面が浮き彫りになり良く分ります。

おやかたさまは、己の至らない面やクセを削りなさい、と言われています。それは杭を削る事になり、先がとがり、地面に突き刺さります。それが道の土台として使って戴けると思います。道の土台になる事は、お国の土台と同じことと思います。

――最近、思わされたことが四つあります――

1『いい事を言う――それが根に水を向けること』

（根30号・S49年4月13日）

お前さん達　いいことを言うんです　それがな根に水を向ける　それですよ…　みたまさんが嬉しい〳〵

――根が肥え、伸びて、枝根が増える。天の分けみたまさんが成長。

2「おやかたさまを信じ切る」と、お行がし易い。今まで、頭で分かっていて、お肚に落ちていなかった。

3　天から直々に見られている事もお肚に落ちていませんでした。毎月、空を見上げ**「天に感謝」**を始めました。

4「捨てるものにお礼を云うんです」のお言葉あり。ティッシュペーパー一枚、ミカンの皮等にもお礼の毎日です。新たなお行を加え、おやかたさまのもとに歩みたく思います。

令和6年1月吉日

つれづれ

「銅像」の教え

大阪　大石麻瑳央

（大阪の大石麻瑳央さんから、こういうお言葉がある、と渡されたのが、このご垂示でした）

（根9号・S46年11月4日）

『日本の美徳を教えよ（一）』

とにかく日本の国はですね、もうあっちこっちに、昔々のね、本当に言うに言えない美徳と申しましょうか、立派なお方の銅像がつくられてあるにも拘わらず、今の若い人達は、一体そういう事に対して、ホンの一寸も気がないなあ、情がないなあって申します。

〝これは一体、どういう訳ですか？〟

……大村（益次郎）さんの銅像の前とか、西郷（隆盛）さんの銅像の前とか、それから楠正成の銅像の前とか――私、もう東京へ参りませんから分かりませんが、そういう所で、本当に懐かしく銅像を拝むという気持ちになれそうなはずなんですけど……。

世間の若い人達は、平気じゃありませんか。むしろ、〝なあーんだ、これがあれか〟っていう位のもんでね、本当に情もヘンもないんじゃありませんかって、これどうでございますか。

銅像をどうお取りでございますか。若い人は、銅像を拝しますか、懐かしみますか。

『若者を抱け（二）』

まあね、若い人の気持ちが堕落しているということをね、これを皆さん気にしてね、やっぱり若者をですね、若者を変な風にね、唯一方に偏してしまうような過激に走らないように、情をもってね、この道のお方は、どうしても抱くんですよ。

抱っこするんですね。

そうして、情に情を込めてですね、〝日本の国は、とにかくお前達の思いと全然違うんだ。有難い国なんだ〟ということを、なるべく早く気付かしとうございますね。でないと、本当に〳〵ハラ〳〵しますよ……。

で、日本は有難い国だということを知らすのには、こりゃ皆さんの情ですわね。道のね、メシを食うた者の、情の向け方が足らなんだんじゃないかということを、Yさん、貴方さんからうちらの方に教えてあげて、その方々から、若い人を抱くようにしなきゃいけませんね。

若い人はですね、いい人も沢山あるのに、目茶苦茶にしてしまう。それはやっぱり、日本の国の有難いことを知らないからですね。

……どういう方法で有難いことを知らすでしょうかね。それね、銅像のいわれをね、あっちこっちの銅像を、やっぱりね、〝有難いんだなあ、この方の時代には、こういう事だったんだなあ〟っていうことをね、やっぱり教える必要がありますね。

日本はね、よその国とは違うんだという事を教えないとね、本当に馬鹿みちゃいますわよ。よろしいか。それは、若者、二十代の方が訳分からないんですからね、かわいそうですわね。本当にかわいそうなもんでございますわね。

それは年のいった方のね、やっぱり、色んなね、気の汲みようですね、これが本当に足りませんね。

つれづれ

――私の好きなお言葉――
人さんを戴く

東京　山口二雄

「理とは自分よりも他人を大切にする…それが本当である」

いま日本人は日本人の本来性を忘れている。「童心・義・情」の三つを多くの日本人は持っているはず。日本人としてのありったけを実行したい。

この道を知らないと、よその国のまねをして今の日本は危ない。

「徳の出し合い、戴き合い」

練り合うということ。お互いに出し合って練る。世間の嫌なことは知らん顔して、いいことばっかしを思い出す。たとえ、いま自分にとって不利なことでも、縁があって廻って来たことを喜んで、勇んで。

フランスの絵画展で入賞した山口さんの油絵『昭和二十年二月十九日早朝日米決戦前（硫黄島）』

やまぐちつぎを Tugio Yamaguchi

やまぐちつぎを●1933年長崎県生まれ。師・門口文雄。沖正弘・宮崎五郎・佐原和行・秋山桑人、日本大学建築科卒、東京都中学教諭を33年、創美会準会員、東京国際フォーラム賞、長谷川栄特別芸術選賞、日本美術評論家大賞、世界平和芸術功労賞、ミネルバ友好芸術賞他

「昭和20年2月19日 早朝 日米決戦前（硫黄島）」

作家は硫黄島にて戦った英霊の想いを後世に伝えるため、緊迫感に満ちた当時の島の光景を現代に蘇らせた。巧みに描写された荒々しい波が、この先の激戦を静かに予兆しており、心が震わされる。

文／クリスティーヌ・モノー

連載

羽曳野物語（二）

柳田　節

来目皇子の陵墓（赤線）を四方から囲み込んでいます
羽曳野「あたらしい道」本部の敷地の写真

第二章　来目皇子（くめのみこ）

〇羽曳野になぜあたらしい道が？

私は東京から、新幹線、地下鉄、近鉄、そして、藤井寺からバスを乗り継いで五時間半。このあたらしい道の場のある、バス停「羽曳山住宅前」に降り立ちます。そのとき、故郷に戻ったような懐かしさを感じながら、また自分はここにいる、と思います。

場まで歩き始めると、羽曳野の丘陵の小高い丘が続き、当時は土が露出していて関西特有の黄色い土肌が散見しています。その黄色い土肌を見ると、私はなぜ、このような知らない場所にいるのだろう、とふと思うのです。自然に私のみたまさんがこの場所に引き寄せられたかのかもしれません。

松木草垣女史は東京で生まれ育ちましたが、関

西を転々とされたのち、この大阪の羽曳野の地に落ち着かれ、あたらしい道の場を開設されました。

草垣女史のご垂示（語録）によると、

「この場所が自然になった　自然なんです　それにも　訳がある」

「この道はな　天意ですよ　ですから　こういう所に　置かされたんえ」

（根56号51年６月24日）

と、ここに自然に落ち着いたこと、そして、それに訳があることを言われています。

また、あたらしい道のある羽曳野の土地処（ところ）について、草垣女史の伝記『矛盾を超えて』（６１５頁）には、

「大阪は天が中加減の処に生んである」

大阪は日本の中心地であり、

「浪速の土地柄、天の理しかして法、国替えに持たしてある何かがある」

「浪速」（広くは神戸、京都、奈良を含む）は、倍々にふくらむ要素を持った処で、「この国の最も尊い処」とも言われています。羽曳野には土地処の理があるのです。

〔あたらしい道の場（『矛盾を超えて』より）〕

「羽曳野の土地柄」について、同伝記の冒頭に、「あたらしい道の場」と題して「羽曳野の土地柄」がどういう土地柄なのか、簡潔に触れています。

「大阪市南郊にある羽曳野市は南河内のほぼ中央にある。東南に二上山、南に遠く金剛山を望み、松林や桃園を配する大小の池沼はこの地の風光を明媚にしている」

ここ羽曳野のある大阪平野は、早くから人が住み始めており、縄文時代より以前の旧石器時代に遡って遺跡が出土しています。したがって、早くから文化の開けた土地柄です。古代の大阪は「難波」と呼ばれ、交通の要衝であり、日本最古の都市として発展しました。

「今から四万年前、石川（大和川支流）流域の丘陵地帯にはすでに原始人が住み着いており、原始時代から上代にかけての遺物が出土している」

また、古代史の本によれば、

・長原遺跡（大阪市平野区）――約三万数千年前の石器群が出土。大阪最古の遺物とされる。

・はさみ山遺跡（藤井寺市）――約二万年前の住

居跡。
大阪府で最古の住居跡の遺跡とされる。
・国府遺跡（藤井寺市）――国の史跡。
約二万年前の生活跡。
・翠鳥園遺跡（羽曳野市）――約二万八千年前の石器群。

（・印は、歴史書からの引用）

縄文より古い旧石器時代の遺跡が羽曳野にあったのです。中でも国府（こう）遺跡（藤井寺市）は、旧石器時代から中世に至る集落遺跡。（大正六年に日本で初めての本格的な発掘調査が実施されて以来、縄文時代から弥生時代の人骨が計九〇体も検出されています）

（同伝記より）「羽曳野市には埴生野の地名が残っているように、ハニワを作る良質な粘土がある。また二上山で採取してきた、サヌカイトを原料として石器が生産されていた」

国府型ナイフ形石器は全国的にも有名で、二上山の火山活動でできた火山岩に、サヌカイトとよばれる安山岩の一種があり、黒いガラスのようなこの石は、石器作りに最適でした。文化的にも早くから開けた場所として有名です。

「古の英雄日本武尊の白鳥陵や、応神天皇の大陵をはじめ、上代の天皇の御陵や、古墳も少なくない」

あたらしい道の場から徒歩一〇分ほどの近くに、白鳥陵や旧石器遺跡「翠鳥園」があります。また、世界遺産の百舌鳥古市古墳群の他にも多くの古墳が点在しています。

「用明天皇の皇子で、聖徳太子の御弟にあたる来目皇子の埴生崗墓陵は、壕も埋れてしまったが、風雪に耐えた老松が独り皇子の陵寝を護っている。この松籟を聞くあたり『あたらしい道の場』がある」

ご承知のように、あたらしい道の入口を入ってすぐ左手が、来目皇子の埴生崗墓陵です。

「所には所の理がある。ここ埴生野は元々からいわくが潜んでいたのである。こういう所にこのあたらしい道の場がおかれたのも深い天意であろう」

昔、羽曳野のあった河内国は、隣の奈良の大和

国と並んで、大和朝廷（ヤマト王権）の本拠地でした。このような土地処で、松木草垣女史は千人の男を育て、日本の再建を図ることになったのです。

「松木草垣女史はこの『場』の芯であり、めどうである…。この国にやがて越すに越せない、往くに往けない時が来る。その時に備えて、天が女史の徳によってしつらえた『場』である。かくてこの『場』は天からの申しものであり、国助けの〝もと〟である…」

（同伝記一～二頁）

以来、羽曳野というこの地で、昭和二七年十二月、「国が危ない、国が危ない」の音が草垣女史から発せられてより、日本を支えることを目指して、元の日本に還り、日本のよさを今に甦らせることで、現代人の内面に火を灯そうとされました。国助けのもとです。

言うなれば、ここ羽曳野近辺は、旧石器の早い時代から人が住みつき文化が開け、さらには天皇家の治める大和朝廷（ヤマト王権）の一部だった土地柄であり、古くから日本の政治的、経済的、文化的中心地でもありました。そのような場所から、いま日本の再建を発信され、そして、あたらしい道の道友が全国から引き寄せられ、そのお手伝いすることとなったのです。

〔ヤマト王権とは〕

「ヤマト王権は、古墳時代に「王（きみ）」・「大王（おおきみ）」などと呼称された倭国の首長を中心として、いくつかの有力豪族が連合して成立した政治権力、政治組織。二世紀末～三世紀にかけて大阪平野～大和盆地の勢力他、西日本や近江を始めとする東海など地域を超えた勢力が連合して大和盆地東南部、三輪山麓の纒向遺跡に成立し三世紀後半までには南東北から南九州まで日本列島の広範囲に影響を及ぼしており前方後円墳体制とも呼ばれる。この時点では緩やかな政治連合を形成していたと考えられている……」

「中期古墳の際だった傾向としては、何といってもその巨大化である。とくに五世紀前半に河内平野（大阪平野南部）に誉田山古墳（伝応神陵）や大山古墳（伝仁徳陵）は、いずれも秦の

始皇帝陵とならぶ世界最大級の王墓であり、ヤマト王権の権力や権威の大きさをよくあらわしている。また、このことはヤマト王権の中枢が奈良盆地から河内平野に移ったことも意味しているが、水系に着目する白石太一郎は、大和・柳本古墳群（奈良盆地北部）、佐紀盾列古墳群（奈良盆地南東部）、馬見古墳群（奈良盆地南西部）、古市古墳群（河内平野）、百舌鳥古墳群（河内平野）など四世紀から六世紀における墳丘長二〇〇メートルを越す大型前方後円墳がもっぱら大和川流域に分布することから、古墳時代を通じて畿内支配者層の大型墳墓は、この水系のなかで移動しており、ヤマト王権内部での盟主権の移動を示すものとしている」（ウィキペディアより）

〇来目皇子の陵墓がなぜ羽曳野に？

羽曳野の「あたらしい道本部」の入口を入ると、左側にこんもり緑に被われた小さな林があります。ここは皇族の古墳です。用明天皇の皇子、聖徳太子の弟君の来目皇子（くめのみこ）の陵墓で、現在も宮内庁が治定し、お護りしている「塚穴古墳」なのです。

この皇族ゆかりの陵墓は現在、不思議なことに「あたらしい道」の敷地が取り囲んでおり、その中に抱かれるようにして存在します。そもそも、なぜこの羽曳野の地に、来目皇子の陵墓があるのでしょうか。さらに、寄り添うようにしてあたらしい道の敷地が隣接するのはなぜでしょう。

この来目皇子とあたらしい道は土地処の深いご縁があるのでしょうか。言い伝えから想像してみたいと思います。

〔筑紫国に久米神社が？〕

調べてみると、『日本書紀』の中に来目皇子が筑紫の国で逝去され、羽曳野に葬られたことがはっきりと書かれていることが分かってきました。

来目皇子は六〇二年（推古十年）、新羅征討計画の際、征新羅大将軍として軍二万五千を授けられ、四月に軍を率いて筑紫国に至り、島郡（福岡県糸島市）に屯営した。しかし、六月に病を得て新羅への進軍を延期としました。そして結局、征討を果たせぬまま、翌年（六〇三年）二月四日、

筑紫の地にて薨去されたのです。

その後、周防の婆婆（山口県）で殯し、その後、河内埴生山岡上（大阪羽曳野市）に葬られたことを、日本書紀は伝えているのです。

その経緯の詳細は不明ですが、概して日本人の口承は精確で思いもよらないことが事実であったりすることが多々あります。古事記や日本書紀の記述もそうで、本当であることが多くあります。この筑紫国、周防、羽曳野の三ヵ所の出来事も充分、事実として考えられます。

また、その筑紫国、現在の福岡県糸島市にある、「来目皇子の終焉の地」の遺跡には、こんなことが記述されています。

「この地は、用明天皇の皇子で、聖徳太子の実弟、来目皇子ゆかりの遺跡である」

「この時、来目皇子が率いた軍の本拠地、あるいは皇子の仮埋葬地とも伝わる」

「ここより北に斜面を下ったところにある久米集落の鎮社久米神社には、海神三神と共に久米（来目）皇子が祀られており千四百年以上経った現在もなお、地元の人々から熱心な信仰を集めている……」

羽曳野では、来目皇子への地元の信仰はさほど厚いとは感じられませんが、この九州の久米集落のある地元では、現在も久米皇子への信仰が厚いといいます。近くに久米一族の集落があることも関係しているでしょう。そもそも、久米氏とは、大和朝廷の軍事集団で、『古事記』『日本書紀』によると、神武天皇の東征に大伴氏の先祖道臣命と共に従軍し、大和の平定を成功に導いたとされる有力氏族でした。

さらにここ、久米神社の資料によれば、

『日本書紀』には、大伴氏の遠祖の天忍日命が、来目部の遠祖である大来目命（天久米命）を率いて瓊瓊杵尊を先導して天降ったと記されており、このことから、久米直・久米部は大伴氏の配下にあって軍事的役割を有していたと考えられている……。

また、神武天皇東征説話に見える久米歌、戦闘歌舞の代表といえる久米舞は、久米氏・久米部の性格を考える上で重要だとされている……。つまり九州の久米氏は奈良の久米氏との繋がりが古事

記を通して考えられるようです。そして、来目皇子はこの久米氏の先祖に繋がりがあるので来目（久米）皇子の名が付いているのであろうとも言われています。

この福岡県の久米集落を中心とした大山北麓一帯には、「大館庁」「小館庁」「射手（井手）」など、皇子屯営の頃より伝わるとされる地名が多く残っている……。

また、久米集落より北西の丘陵上にある久米遺跡では、弥生時代中期（約二千年前）のより細形銅剣・銅鉾が出土するなど、有史前より玄界灘に面した海上交易の要衝として、この地が繁栄していたことが分かっている。おそらくこのころは軍船の出入りする軍事基地であったと思われる……。

この九州の糸島市の来目皇子終焉の地は、来目皇子が率いた軍の本営地であり、皇子の仮埋葬地だったと伝えられている……。

と、久米神社他の資料には書かれています。

〔大和国にも久米寺・久米神社〕

久米神社と久米集落が、筑紫国の来目皇子終焉の地にあることは分かりましたが、全国でもう一ヶ所、来目皇子にゆかりのある場所があることも分かっています。それは、大和朝廷の最初の本拠地、畿内大和国（奈良県橿原市）であるからおもしろいのです。羽曳野のある河内国のすぐ隣なのです。

羽曳野の地は同じ畿内で、元々、ヤマト王権はここから興り、大和国と河内国の二国はいずれもその都のその中心地です。また、橿原神宮はそもそも初代天皇である神武天皇を祀っている神社であり、ヤマト王権の確立にかかわっていました。

久米寺の開基は、来目皇子とも久米仙人とも言われています。久米仙人とは今昔物語などに登場する久米仙人ですが、創建の事情は不明です。しかしながら、ヤマト王権で軍事部門を担当していた部民の久米氏の氏寺として久米寺が創建されたと言われています。

久米氏とはヤマト王権の軍事部門を任されていた主要の氏族であったというから、羽曳野が昔は河内国であり、奈良の大和国と並び、ヤマト王権の中心地であったこととも整合します。

また、同じく橿原市久米町にある久米（御縣）神社によれば、そもそも、「久米氏は大伴氏と並ぶ古代の軍事氏族で、かなり古くから朝廷に仕えていたと見られ、記紀の天孫降臨の段では久米氏の祖（古事記では『天津久米命』、日本書紀では『天槵津大来目（アメクシツノオホクメ）』）がニニギの前に立って仕えたことを記している……」といいます。

「また神武東征においては久米氏の祖『大久米命（大来目）』や『久米部』らが、多くの場面で活躍しており、神武天皇即位後、神武東征に功のあった者を賞した際、大来目を畝傍山の西の川辺の地に住まわせ、そこ『「来目邑」と名付けた……」といいます。

「この来目邑が当地であり、ここに居住した久米氏もしくは久米部の子孫が祖を祀った」のがこの久米神社だとしている……」（諸説あり）。

古代日本における軍事氏族の一つで、久米部（「くめべ」と読む。来目部とも表記することもあるといいます。）上田正昭氏は、「久米歌から考察するに、宇陀の高城の防御を施した垣の内の集団生活にこそ、久米集団の本源的様相があり、元は山人で、南大和の王権に直属するようになり、御県の神が祀られるようになった」としています。

古代から有力氏族であった久米氏、それにゆかりのある来目皇子が、この地に何らかの縁があったとも考えられます。そして、この地は昔、河内の国と言われ大和朝廷のあった土地であり、古代日本の政治と文化の中心地であったことも間違いありません。

その大和朝廷の皇族、来目皇子の陵墓を囲むようにして、あたらしい道の敷地が隣接してあるのは、実に不思議な気がします。

来目皇子　埴生岡上墓

編集後記

肚を据える

座談会

○横山裕介さんは、「自分をさらす」ことを肚決めし、林賢さんは、お父さんに詫びることを肚決めしました。

○見事に場の雰囲気を再現した、故森河内さんの映像作品には透徹とした眼力、豊かな感性が感じられます。

○森河内さんは、映像だけでなく筆力もあり、あたらしい道の核心を簡単明瞭な一言に表していることに、改めて驚かされます。

○例えば、「天によって、大自然によって、ご先祖さんによって生かされている自分」「拝むものは自分の身の内にある」「自分が、本来の自分であるみたまさんにそいきることが、本当の日本人に立ち戻ること」

○日常生活では、「親子の理、夫婦の理をしっかりとたてなおし、成ってくる姿全てをよし！　として、喜んで毎日を過す」これが「日本人としての基本」と言っています。

○最後は、「通ってこそ道、素直な思いで毎日を実行する中で、自分本来に立ち戻り、本来の日本人に成って行く」「ひいては、それが、日本が日本に建て替わっていく姿」と言い切っています。

日本の国柄

○『白村江の戦い』において敵国「唐」に捕えられても、祖国日本のため誠の行動をとった大伴部博麻を知る人は今少ないでしょう。百田尚樹氏が僅かに『日本国紀』で触れています。

○「愛国心」という言葉の語源ともなったこの出来事ですが、昔から日本人は、農民であっても一兵士であっても、国の大事という、事の本質を見抜く力（みたま）を持っていたことを物語っていると思います。

日本の人柄

○皇統の歴史を神話からまとめた北畠親房の「神皇正統記」も、読み返してみたい歴史書の一冊です。

大和撫子

○幕末に高杉晋作をも支援した女性勤皇歌人、野村望東尼も、戦後は知られない日本人の一人かも知れません。

理と伝説

○硬い「理」と柔らかい「言伝え」とを対比させて戴くところに持ち味が感じられます。

○「罪を着るのは平気でないといかん」と言われますが、「場のため道のため　やかたのため」という条件が付きます。

つれづれ

○銅像の教え　同じ人物でも銅像になる人物にはそれだけの理由があります。立派というだけではなく、人のためという「義」の気持ちのある人物です。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

（年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお願い致します）

申込先

あたらしい道本部

電話番号　0729（56）7971

FAX　0729（57）5100

季刊誌「あたらしい道」　令和6年秋号

令和6年9月8日発行（第540号）

発行責任者　中井　健

編集責任者　柳田　泰

発行所　一般財団法人　あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872　TEL：0729（56）7971

印刷所　キクイ印刷工芸社
大阪府羽曳野市古市6-12-9
〒583-0852　TEL：0729（56）6881

季刊誌「あたらしい道」　令和六年秋号　〔５４０号〕　（２０２４年）　一般財団法人　あたらしい道